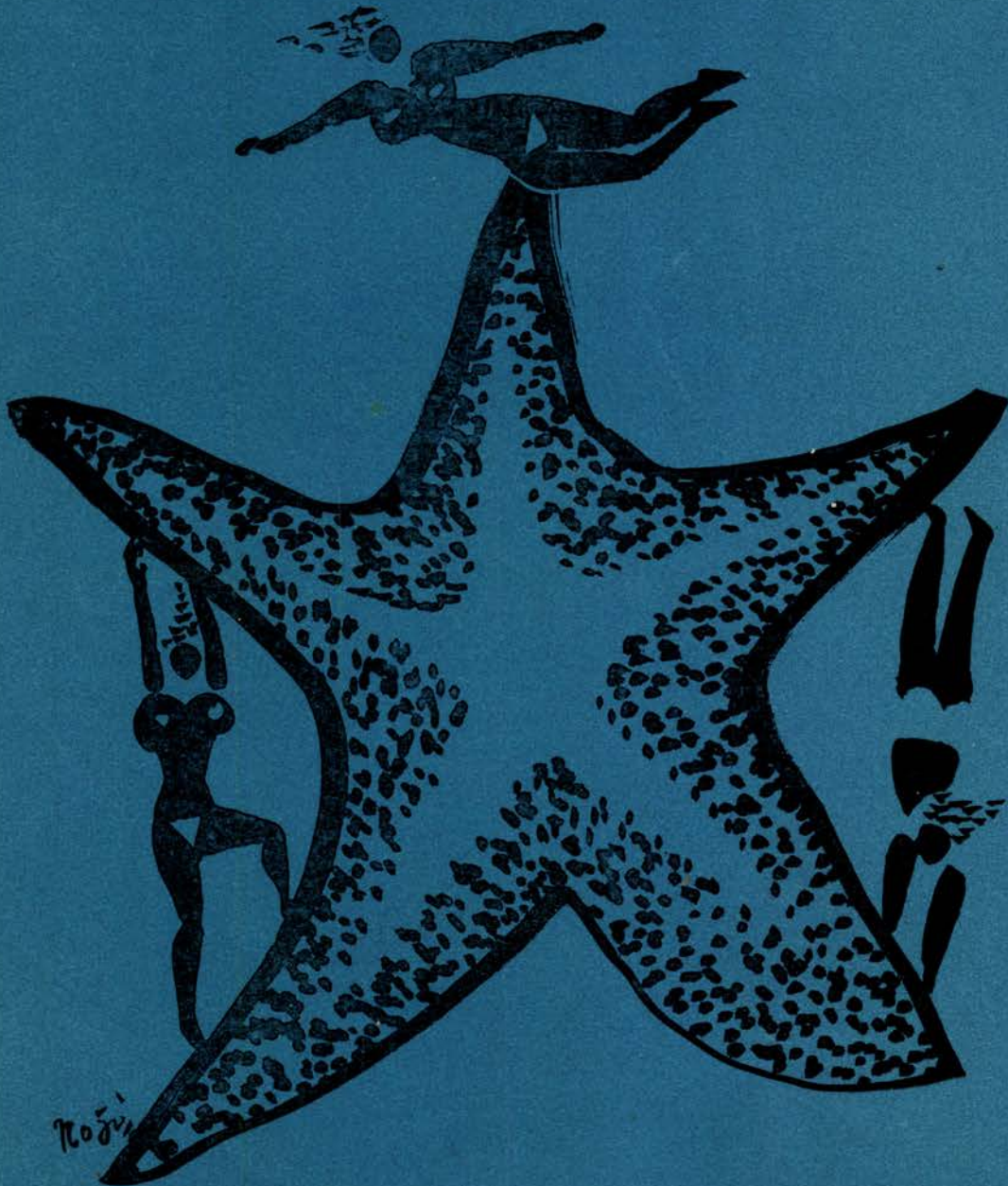


川柳の雑記



麻生路郎☆主宰

八月号

No. 411

Pensoj flugas trans la land-limon
THE SENRYU ZASSHI

川柳雑誌社主催八月句会

中島生々庵氏歸日歡迎の夕

9月本社句会

兼題
無題
波

暑中御見舞い申し上げます。

柳文誌い合わせでお気な顔を見せてください。

日時 八月八日(火)午後六時

会場 関西会館 (四七四〇番)

大阪市天王寺区上ノ宮四八

(天王寺電話局東隣り)

道頓 市電上本町八丁目下車(北へ一丁車道)

兼題 雲 藤生路郎選

(紫郎選に限り七時出句切厳守)

通 選 若木多久志選

みやげ 松江梅里選

洋食 上井文蝶選

席題 三題(当日発表)

柳話 欧州みやげ 中島生々庵

呈賞 名題天位・紫郎選二位に本利同賞カツ

会費 百円

幹事 紫香・淡希・いさむ・華花・文枝・霜佑・雄三

・与馬志・白水・木洞・すけ・若菜・木新

・柳志子・新遊・...

★投句だけの方は郵券五十円

同封 切八月六日

大阪市住吉区万代西五丁目五番地

川柳雑誌社句会部

電話・住吉四六三八

麻生路郎著 好評噴々

新川柳鑑賞

川柳の味い方・五百数十句

毎日新聞評

「麻生路郎さんは明治三十七年が川柳を手がけているというから川柳歴はもう五十五年にもなる。この新著は麻生さんが毎月出している『川柳雑誌』に掲載されたものを中心にその他の柳話や句集からひろった五百六十句について、ひとつひとつ丁寧な注釈を加えて、鑑賞の手引に資するとしたものである。」

大阪府・豊中市・西平野一丁目五番地

発行者

川柳雑誌社

電話 大阪 四六三八
住吉 四八八二
住吉 四八八二

麻生路郎先生著

川柳とは何か

送価 七、四円

川柳の作り方・味い方

川柳はわれわれ庶民の饒らさる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたものが十七音に圧縮された諷刺と諷刺の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新であるその川柳がいかにして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味い方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所 川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区弘力町27 電話東京29507

価二五〇円

送費八〇円

お札版

五、五頁

不朽洞句帖

麻 生 路 郎



夾竹桃むかしながらに暑いこと
七月の裸うれしいもののうち

道後温泉にて

坊っちゃんは一脈通じる湯にひたり

道後の湯黙禅さんへ会釈する

狸のれんへ腰を下ろしたへそ曲がり

妻君にまかし狸通は今日も留守

お土産も坊っちゃん列車竹細工

土産物も子規漱石じや儲からず

土ひねりに砥部へ

ここから砥部か重信川渡る

松山市の子規堂にて

子規の部屋ランプも置いて芝居めき
今ならば死なずにすんだ子規ならん

註・默禪氏はホトトギス派の俳人。狸蓮氏は選つうの人
趣味の店「選のれん」を経営。

川柳雜誌八月号目次

不朽洞句帖	ひつこの大の文学	千句の壁	「晩酌」のひとつときを愉しむ	旅のつれづれ	名句と難句	句評リレー	川柳と宗教	道草	続・川柳料理暦	葛の葉	豚だんぎ	川雑川柳まつり(第八回)	特別「気軽る」発表	課題	★現代柳人録	美笑さんを悼む	美笑句抄	雑文団地	★	川柳塔	同舟近詠	近作柳樽	金泥集	★柳界展望	一路集	★柳樹室
麻生路郎	東野大八	直原七面山	石曾根民郎	八木摩天郎	麻生路郎	文蝶・魅光 素身郎・蝶花	戸田古方	麻生路郎	水谷竹莊	富士野鞍馬	木山遠二	麻生路郎	麻生路郎	小西雄々	川柳書架	不二田一三夫	麻生路郎	麻生路郎	諸家	麻生路郎	北川春巢	麻生葭乃	戸田古方	杉谷湖山	木村水洞	▼ペンンの散歩
(3)	(14)	(15)	(12)	(40)	(4)	(16)	(25)	(18)	(28)	(27)	(26)	(30)	(32)	(19)	(41)	(41)	(40)	(41)	(6)	(11)	(20)	(42)	(43)	(39)	(36)	(46)



川柳 名句と難句

麻生路郎

かんたんに葬式してやと言うて遊び

(涼髪)

最近に亡くなった豆秋もこんなこと言いたい。榮居も、知人にも知らさず、ひそかに死んでいった。

これは、あとに残った近親者に少しでも迷惑をかけないようにと、死にゆく人のこころ使いだ。

死に直面した多くの人たちが、斯うしたおもいやりを持つことは、あとに残った人達が、少しでも立派な葬式を出してやりたいという気持ちから、かなりムリをして、葬式がつい派手になりやすいことを戒めたものである。この句はこうした心理を巧くキャッチしていると言えよう。

〔一九一〕

短冊のけいこでもして死を待とう

(豆秋)

死はもう時日の問題となったことを自覚した人の悠遠迫まらない態度である。そうとは思っても、なかなか常人のくわだて及ばないものだが、作者豆秋は、ウソいつわりもなく、これを実行に移した超人的な精神生活者であった。川柳のよさは豆秋のようになんて十七音字内外の文字に自己の魂、自己の生活をブツ突けに吐き出したところにある。

柳壇の一案と言われた川柳詩人須崎豆秋は本名は清次、一八九二年九月十日香川県

〔一八六〕

阿呆んだらと一ぺん叱られてみたし

(阿茶)

オールドミス心理の動きとして見る時、この句はいきいきとして来る。愛する夫から、
「阿呆んだらッ。だから言わんことじやアない。」

と、一ぺんでも叱られて見たいと言うのである。叱られることのない淋しみと言うものが、どんな味のものであるかは知らないが、それをのぞむほどの淋しさが、ひしひしと迫る時のあることぐらひは想像し得ないこともない。この場合「阿呆んだら」という大阪弁がすべての情景を実に雄弁に描き出していると言えるだろう。

〔一八七〕

交通マヒ向いは遠くなりにつけり

(花村)

道路という道路が、車、車、車で埋まっている。向い側へ行くのにも容易でない。その歎声がこの句となったものである。

この句は、明治は遠くなりにつけりという近ごろの流行語の引用句で、作者はそこに面白味を感じたのだ。

〔一八八〕

放送局に勤めて擬音係なり

(独仙)

放送局に勤務しているというので、アナウンサーでもあるのかと思っていいたら、擬音係で、シュシュボツボの汽車の音をさせたり、ザーザーザーと雨の降る音をさせたり、ガラスの屑を投げつけて、夫婦ゲンカ

の物をプチ毀わす音をさせたり、ポーン、ポーンと時計の音をさせたり、ボカボカボカと馬の走る音をさせたりしているのであつ

た。最近ではマイクロホンの性能がよくなったので本当の音を録音して用いることが多くなったが、特殊な雰囲気の効果を出す場合には擬音の方がいいことがある。

しかし、擬音係だと聞かされた時、何んだ擬音係かと肩すかしをされたような馬鹿臭きさと、滑稽さを感じたのである。

〔一八九〕

身内から立てば党派は言うとれず

(紫光)

叔父さんが立候補したので、ヤムを得ず参謀の役を買って出た。そんな時に私は自民党は嫌いだから、応援はご免だなどとは言うとれないと詠んだのである。これは確

に日本的な感情の一つの穿ちに違いない。作者はそれを率直に一句として纏めあげたものである。

〔一九〇〕

坂出市に生まれ、一九六一年五月二日に、大阪府阿倍野区旭町三丁目十四番地に没した。資性清廉、逸、路郎門の逸材で句集ふるさと」に多くの名句を遺した。

〔一九二〕

これほどの恥辱もたえるまでに老け

(竹青)

「これはどの恥辱も」とは、どれほどの恥辱であるのか作家以外には、うかがい知ることは出来ないが、それでいてこの句には捨てがたいものがある。人間の一生について考えざるからだ。どんな恥辱にもたえて、どこまでも生きるということの意義を思われるからだ。

〔一九三〕

殺人犯を酸素吸入までして生かし

(草右)

作者は医者である。この句から類推すると殺人犯人も亦顔死の重傷である。それを酸素吸入までさせて、生命をとりとめたところに、作者の感慨が遺憾なく盛られてある。殺人をした男であるから、死んだっていいじゃないかと言うことは世間の人と共に一応は考えられないことはないが、医者としての立場上そうした感情に支配されていいものであろうか。医者は相手が殺人を犯した男であらうと、なかろうと、そうしたことに関係なく、人命救助が目標でなければならぬのではなからうか。しかし「酸素吸入までして」生かすことには多少の疑

〔一九四〕

女下駄オカマが煙草買いに来る

(満潮)

男娼の日常生活の一端をスナップしたものの、タバコを買いに行くのにも女下駄を突っかけて行くところに男娼は男娼らしきの自然さがある。しかし、オカマ、女下駄、うちわに歩くということとは近代女性からは遙かに遠いものである。

〔一九五〕

草月展なる程捨てるものはない

(むじな)

草月展を覗に行つて、驚嘆の声を放った句であるが、生花とはこんなものだという世間一般の生花観から見たら、素材の広いので、こんな句が生れるのもムリはない。その点この句は穿ちの句だと言えよう。草月展と言うのは生花の一流派、草月流の展覧会のことである。草月流と言うのは一九二六年勅使河原蒼風によって草月会が創始されてからの呼称であり、投入花や盛り花に近代造形美術の感覚・素材を大胆に取入れ生花界の革新を企画したのがその特徴なのである。

〔一九六〕

遊ぶこと知らぬ社長をほやくなり

(牧人)

社長ともなれば、その業界第一のエキスパートを自認しているだけに、遊ぶということなどは全く論外である。一にも二にも自分の仕事に結びつけて動き廻っているのだ。

〔一九八〕

あれた手を尊しと見るも齢か

(雄声)

「うちの社長は遊ぶということを知らない」などと今更はやいたところで、どうにもならないのである。しかし、その部下も亦野暮天であることは確かだ。でなければ動まるものではない。軽い穿ち味はある。

〔一九七〕

気の弱さ新聞一つ断れず

斯うした男もいるものだ。

「あんた、そんなに新聞をとってどうするの、ことわって頂戴よ」

「お前がことわったらいじじゃないか」

「わたしが言つて、聞いてくれるような新聞屋さんやないの。何んとかして頂戴、家計簿の赤字が殖えるばかりですもの」

「弱ったなア。お前がことわってダメだったら、オレではなおさらダメだ」

「では、新聞代はあんたのお小遣から出すことにして頂戴」

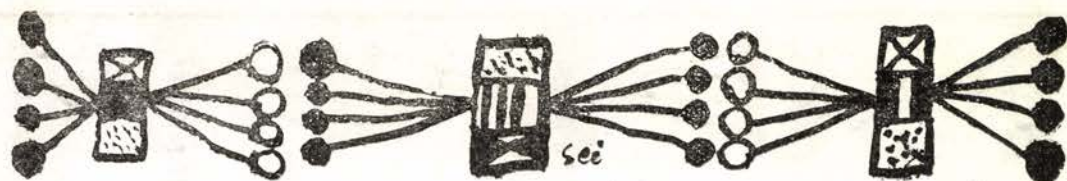
あのおさんの手も随分あれているな。苦勞の足跡といった感じだ。洗濯機のある世の中に洗濯機も買わずに暮らしていられるのかな。イヤ買えないのかも知れん。若しそうだとすれば気の毒だなア。しかし、身奇麗にしていられるところを見ると、すべて自分の手で始末をされているのであらう。

(与呂志)

しかし、作者はそんなあれた手を尊しと見るのも齢のせいかしらと時代のズレを反省しているが、彼も亦世の荒波に揉まれたからに違いない。



ビールは
アサヒ



大阪市 西 いわを

屋上で夏の女とビヤホール
物言わぬ子となつて来た十七才

北 陸 路

ハイビル東尋坊で抱きつかれ

岡山市 武 部 香 林

バラ展で女の匂い邪魔になり

皮膚一枚そとはきびしい現実か

大掃除新聞ひろげる役がつき

支えあればめくらのんきな事も云え

大阪市 北 川 春 巢

おくれ毛の多さを医者は見逃さず

人数の都合で呼ばれたとは知らず

紅一点はあっち向いてる隠し芸

ハッイ 築山 快夢 起

何でもない認印一つを押し送り

社用族らしいチップの気張りよう

所得倍増夢みただけで誠になり

ホノルル市 羽 佐 間 柳 葉

ラブヒール人の個性を見せて滅り

落選で存在だけは認められ

堺 市 吉 田 圭 井 堂

持っている株が戦争すきにする

二けたに今日もなりそな事故死数

取る物が無くても押える靴を脱ぎ

どこもかも麻痺を尻目に掘り返し

山口県 長 野 井 魁

寄る歳かベン耳借ったまま忘れ

割勘に女はビールで太刀打ちし

十代が映画もどきにからんでき

岡山県 直 原 七 面 山

がみがみとぶうから勉強してる体

ン連人工衛星打ち上げ

政治家は疑い科学者は信じ

子供らに叱られてババ歯を磨き

校長室の柱時計は故障中

一銭拾う心を妻にさげすまれ

親貧しく秀才の子をもてあまし

いつからか私のために化粧をし

本当に独身ですかと家まで来

なにもかも太陽へ向く恐ろしさ

鳥取市 河 村 日 満

二十年勤務うちでも角がとれ

Y 君 結 婚

まだ板につかず女房へさんをつけ

愛情の句碑は涼しいとこに建ち

豊中市 足 立 春 雄

昔話だけが自慢の廻り椅子

倉敷市 木 村 千 容

七十五目前で祝うたんじょうび

たつても座ってもどっこいさどっこいさ

温古知新お点前さんの稽古あげ

大阪市 市 場 没 食 子

貸す金はないとこしやくな従姉なり

ゴルフまでまだ手は出まさんと主任さん

地下鉄を月給袋押えて出

環状線話の種に家族づれ

大阪市 土 井 文 蝶

十円は十円の音アスハルト

本心を読まれて酒が不味うなり

落とす程金を粗末にしてみたし

大阪市 正 本 水 客

宴会のなかでしんみり話し込み

寿し巻いて待っててくれる人であり

どの顔も窓の景色を見ていない

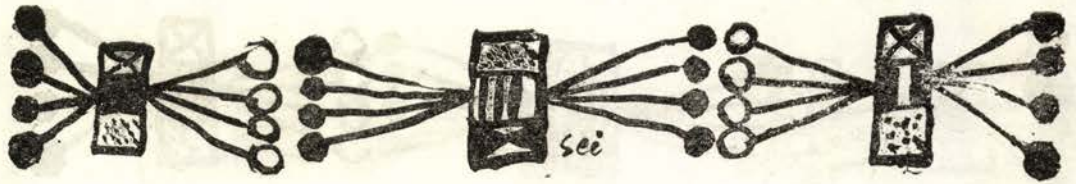
石塔の白さのなかを白い蝶

大阪市 丸 尾 潮 花

沢市のように嬉しく手をひかれ

割り込んで掛けて無心に編みつつけ

食うための三味線箱もいる難波



脚下照顧あしふみしめてふみしめて
小さな抵抗こわされた塀縋わす

加賀市 野村 味平

病む妻へ千恵子抄を読んでやり
剽軽な博士で患者機嫌よし

大阪市 木村 水洞

税金でする外遊は派手に発ち
眼に青葉女の薄着目立って来
ボーナスの端数は妻も大目に見

豆秋氏をしのぶ句会

亡き弟子を偲ぶ言葉も途切れ勝ち

高槻市 福田 丁路

ハタタリもあつて如才のない政治
ビール一本で容赦なくふんどくり
両隣り日曜大工の音を立て

大阪市 真鍋 一瓢

物言えば才気喚発職がなく
中絶と事もなげなる話し振り

霞町で

食べ残し猫の目をして食う仲居

大阪市 後藤 梅志

播州瀧野にて

どっしりしている田舎の鯉轢り
腰掛けで飲んでも下手はすぐ謡い
大ジョッキ稽古帰りの風も良し

米子市 小西 雄々

保釈金積む犯人の憎くらしさ

職貧しわが家のレジャー昼寝をし

大阪市 山川 阿茶

金の蔓切つてはならぬと二号生み
見せる人ないのに辛抱するドライヤー

大阪市 金井 文秋

かたくなな心が消えぬ長火鉢
はした金されど賽銭には惜しく
自惚れと云う盲点で易者食い
智恵を貸すだけで指図の出来ぬ人

加賀市 那谷 光郎

妾宅に飲むのんのんへ逮捕状

チョコナンと茶棚にコケシ老夫婦

電文のようなハガキが父から来

下関市 桜川 不水

エプロンを脱いで一盃うけてくれ
放蕩の因果はめぐる下足番
病院を出て唾を吐き深呼吸

岡山市 浜田 久米雄

映画見に行きたい妻をおさえとき

妻の留守水気が残る皿でたべ

味噌汁の味を変えない妻であり

大阪市 清水 白柳

亡母百カ日を修して

南無阿弥陀天寿を終えし頬白し

押入れに似た隠居所で死にました

心残りは仮の住居で母が死に
燃え上る恋は信号など見えず

大阪市 水谷 竹莊

鯛の眼をみつめてうたいじつと聞き

鳥取市 杉谷 湖山

三味抱いたままで営業用の鯛
桜から郷土は梨の真盛り
お願いを神と仏に使い分け

京都市 大鶴 喜由

子のは子のは子のもの換えたり殺したり
フレンドがあるのよと次語らせず
取るに足らぬ男がいかす恋の所作
全学連デモった跡に芽も吹かず

尼崎市 小林 文月

警棒のような洋傘ぶらさげて

奈良県 飯降 白舌

他愛なく妥協した夜の味気なさ
出張が楽しいという彼であり

生活のにじみでた背をむけて去り

家柄を話のはしに匂わせて

生涯を賭ける仕事といつかなり

さびしさも電車の揺れに癒されて

奈良県 西辻 竹青

男がすたりますよと双方座らせる

呉市 林野 甦光

三面鏡うそうそが写って居



アナウンサー 天気予報がいやになり

名台詞楽屋で借金取りが待ち

岡山県 福島鉄児

ハイと云う返事は過去の妻だった

よく叱る奴とは犬も心得る

へそくりの株が騰つてつい洩し

岡山市 服部十九平

海岸のデイトどちらもサングラス

節孔を覗くスリルの順を待ち

尼崎市 長谷川三司

親切な奴だと名前を聞き忘れ

豆秋君を悼む

フンフンと酒に嬉しい君なりし

うちのババウちのママはと二号の子

P.T.A 奥様眼鏡をかけ始め

西宮市 若林草右

ほんぼりの色だけ残る通りぬけ

名のついた桜ほど汚い通抜け

広島県 山田季賛

ひとり合点して結局子を叱り

岡山県 田村藤波

民謡を土産にみちのくからもどり

停年が近づき具になった父

児島市 本田恵二朗

喜寿の座へちよこなんとして母美人

磯つたい老婆あつさり裾からげ

選挙事務所蠅がたかっているみたい

京都市 松川杜的

思春期か長男無口な日が続き

パチンコは負けた思い出ばかりなり

鳥取市 森本法泉子

温泉地喧嘩のように増築し

池田さんこんどは姿勢かえてみる

倉敷市 松村万古

死ぬ迄は満足出来ぬ芸の虫

骨が有り上司の弱気物足らず

お子さんは膝へと担ぎ屋の荷物

岡山市 津田麦太楼

元の職場たまさか訪えば給料日

耳輪首輪腕輪羅漢のように笹め

堺市 高崎雄声

佗しさはオーバの裏が切れ下り

押しかけて乗らねば生活できぬ世か

島根県 藤井明朗

プラチナの歯のぞかせて女老け

旅好きのプランへ妻もあきらめる

岡山県 永松東岸

ハンドルをはなして煙草つけて見せ

単車買ったその日十七才の事故

倉敷市 野田素身郎

人事異動先が見えててこせつかず

カタログを取り寄すだけにまた終り

当然のように女は遅れて来

大阪市 伊達堰子

赤旗も振つとれまへん子が生れ

デモの渦あれが彼女の顔かいな

東西屋股旅姿で濡れて行き

へたり込むこの兒も筋は争えず

大阪市 不二田一三夫

闘志満々三角形の尖端よ

主治医おきそろそろ人を頼りだし

工場から見れば事務所は遊んどり

兵庫県 酒井ひか平

斬新と云つてもアラン調の靴

ああ涼しなつたと女髪を切り

恐妻家妻の美しくさを認め

青屋市 丸川初甫

作業服着てても人柄ちと違い

より添うて顔の皺など気にしてず

まだ浮気する気の皺へマッサージ

再会へ戸籍調べのよういき

岡山県 池田古心

何時見てもストップ寄贈時計派手

東京都 石居高志

居眠りへ床屋無慈悲な蒸したおる

言葉尻女たくみに捉えてき

菊一輪婚期のとうに過ぎた部屋

大阪府 早川清生



土地収用しばし菖蒲の美にみとれ
音楽にあこがれてたがバーで弾く

駄菓子売ってるそんな場末へ仲居嫁き

女遊びやめたら事業運も尽き

後添にきて野の花で部屋飾る

堺市 辻 圭水

創立記念日異動があっただけのこと

役付で傍系会社へほりだされ

家裁まで行くお化粧の長いこと

岡山県 野々口 美丹

もぎ立ての豆初恋の味でかみ

捧げてもつきない愛と知りながら

西宮市 小浜 牧人

碁が強くなり退院は未だ出来ず

ギターかき鳴らして病氣忘れてい

有難いかな起きて動けば叱られる

哀悼 豆秋さん

鉛筆をなめていのちを句に残し

池田市 前川 左文字

年金があるので離れない孝行

「どうかしてるワ」と月曜ボケの訂正印

岡地風景

白壁へ明治のタンスどこへ置こ

アパートの蠅執拗に追い打たれ

岡山県 池上 知恵美

ふとこで泣きたいような春の雨

当てが無くなってセットも爪も伸び

大阪市 橋高 薫風子

飯を食うさえも勇気の要る日なり

母親を呼んでいる子へ祖母が来る

島一つ買うて暮らせば涼しかる

下関市 中村 九呂平

トップ屋の感が古傷つき出し

独身寮また即席で気焰あげ

大阪市 西川 晃

からだじゅう性器のような女なり

羨やましセーヌ河畔の古本屋

街娼の昼の素顔は孫を連れ

鳥取県 田中 蛙眠子

綴り方パバの酔態書きよって

ズングリムックリ歩む男で遅ましい

講演会何処かに右翼おりそうな

岡山市 林 葵丘

後釜をねえとヒモが智恵をつけ

偏屈も普通の家を建ておった

神戸市 仲 どんたく

無重力状態に似し夫にて

門限を越えて犬にも低姿勢

なんぼほど要求したろと労組族

平田市 久家 代仕男

飲み屋の奴もう泥臭い足でなし

休日部長としての懐手

夏山の朝に声なき里の霧

大阪市 本多 柳志

労基法無視した分はのむつもり

日曜大工妻を無視した棚の位置

三面へ怒り社説になだめられ

出雲市 原 独仙

衣更えボケツから出たコンドーム

吊り橋で見知らぬ女へ肩を貸し

岡山市 江国 幽谷

玄人の方が苦心に苦心をし

バラックに住んで一生大工をし

長いヒゲ大義に徹したように伸び

岡山市 光好 陽子

百姓の嫌いな子ばかり案じられ

無鉄砲しても他人はほめそやし

おどけてるように女のアイシヤドゥ

西宮市 樋口 舟遊

垣にバラ植えて近所と付き合わず

石山寺

伝説の式部の部屋をのぞく雨

三井寺

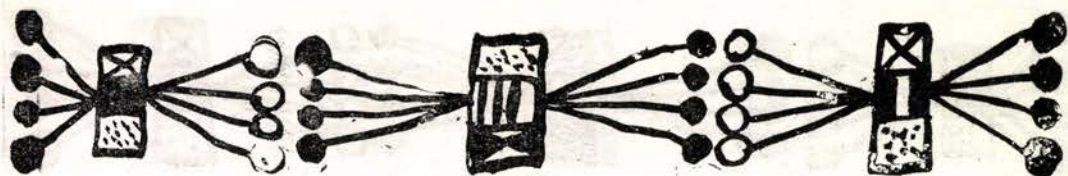
晩鐘は十円也の音にする

新潟県 高野 むじな

悪口云われまい二次会にも出掛け

オリンピックへもうけたいのがまずさわざ

兵庫県 吉原 紅月



米の値も知らぬ女に養われ

ホームバー妻が手綱をしめて居る

キッスの真似をして祖母を驚ろかせ

サーピスがちと物足らぬホームバー

大阪市 魚住満潮

続・西成界わい

背広着てオカマもバスを待っている

百円の貸し胸ぐらを取らまえる

惨死体ズロースまでも脱がされて

働いて儲けた金と書き添える

徒食十年いれ墨もはけてくる

愛媛県 村上旭童

すじがどうあるとチャンバラ嬉しがり

百姓に養子やっぱりありはあり

寿命ですと修理屋も取り合わず

倉吉市 大前鳴悦

たわいなや五目ならべも子に負ける

母親をおだてて貰う術を覚え

明け易き夢破られて鶏を飼う

鳥取市 北村三步

大阪にて

大将と呼んで呉れたは靴みがき

お隣りのポーナスまでも計算し

いやなこと云って仁丹かみくだき

大阪市 米虫一乃字

魚屋は捨値だと云い陽は落ちる

ハイヒール脱いで家庭の娘にかえり

家族八人支える汗のふき心地

神戸市 傍島静馬

くだを巻く仕草おやじに生き写し

小遣いは兄弟仲良くせびりに来

みおつくし鳴っても散歩帰らない

布施市 森下愛論

自動車のドア開けるだけのユニフォーム

大阪市 河井庸佑

見栄でやる附属びりだとは言わず

ナイターへ野球を知らぬ妻も連れ

席ゆずる人もなく老婆バスにゆれ

大阪府 谷沢好祐

ようしゃべるからか手紙の下手なこと

美点掘り出して拡大した送辞

良い男だったと辞めてから気付き

降るまでは傘を持ちとうない男

泉大津市 高津徹也

孫の数みやげの数とくい違い

縁談を娘が承知した夜の床

愛媛県 榎紫光

持つて来たお琴一度も聞かぬなり

ルームクーラー空気にさえも金がいり

ユーモアのわからぬ人に係長

化粧せぬ屑買女哀れとも

ダンス出来ぬばかりにチャンスまた逃がし

青森市 工藤甲吉

忙中も女となると会いまする

しあわせの歌が聞こえる五月晴

めつきりと川が光って五月来る

いただきまアすと役人は平気なり

西宮市 門永三舟

音楽は苦手で先生になり損ね

玉野市 伊原明林

趣味かしら男こせこせゆきときどき

子を叱る口を女は別にもち

内職のもうけ算盤子におかせ

赤旗が社長の血圧又上げる

松江市 舟木与根一

生後一カ月とは大きな鯉のぼり

別荘へ物干台を見せて建て

下役は開襟シャツで涼しそう

豊中市 林夢虹

独りして飯食う淋しさに負ける

捨てられまいとして子供まで生み

夕焼の坂を屑屋が下りてくる

朝が来たよと雀が鳴くが二人は死んでいた

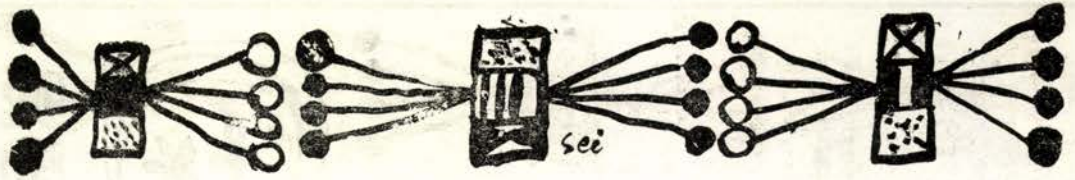
尼崎市 吉本菁風

我が子へはあんがい古い事を云う

ふるさとで処女を奪った人に会い

ジブシーと云われる程の移転好き

西宮市 山本一傘



悪銭を身につけたから出世をし

傘借りた雨の日からの無沙汰なり

高知県 建沼康之介

食うものも食わずにの見本入院し

スクーター事故

またやったんあほうやなあと見舞われる

大阪市 今西生薑

車賃位いまけやとねばれる

ああさよかさよかとねっから聞いていず

三面記事今日も子供をそまつにし

京都市 室井八九寸

母の日のぶどう酒父が空にする

厄除けの団扇拾えず事故にあい

奈良市 内海敬太

塔見える停車場一人降りただけ

かちとった分を斗争費に取られ

司書Sさん結婚す(二句)

図書館の花明日からは実を結び

岡山市 横山一声

農繁期花嫁さんの腕だめし

病弱へ創価学会眼をつける

小松市 関戸宗太郎

堂々と社長とならぶ小役人

殴られたからさん付で記事になり

検査官屋台であえばただの人

もとかけた踊り社長が見ずに立ち

石川県 高山涼髪

シャツ一枚買わず競馬だマージャンだ

昇給へ妻の米とぐりズムよし

妓もませて町政うんぬんけしからん

美祿市 安平次弘道

後世の史家にまかすと剣をとり

整然と言ひ勝って冷たさが残り

失業者よ牛は耕転機をうらます

御利益は教祖にあった倉を建て

宇部市 平田実男

ハイ課長はゴルフへ行つてるとも云えず

ほっとした顔も乗つてる霊柩車

棟梁にのみを向けた日もありき

大阪府 高橋尚史

恋人へ親も同意のお茶をいれ

葬式へことは欠かさぬ市長にて

パパ車買うてと妻の免許証

同舟近詠

大阪市 橋本緑雨

社会福祉老人半額運動を始め

郷土入りも出来ず一生終るよう

須崎市 高峰柳児

踏切りでのぞかれています自家用車

盲判その上くわえ煙草なり

病人の機嫌見舞の封を切り

瘦腕へ頼るまなこがよりかかり

和歌山市 秋月宏方

どこか処女に似ている新刊書の匂い

ボロ会社様様儲けさしてくれ

利子で食う木の芽木の芽を摘むかたち

一円硬貨金庫で寝た夜思い出し

今治市 長野文庫

工事中何か出たので史書を繰り

伝説へ主観も交せてバスガイド

手加減と知らず彼とは互先

色盲じゃ無いかと思う柄を着て

大洲市 米沢晩明

P・T・A着替えるものもなく出掛け

カンパスのここに欲しい雲一つ

発車ベルまでも老師に送られる

東京で発言したを土産にし

有楽町夢にえがいたとこでなし

敦賀市 船木夢考

自信あるロングパットは風を切り

ホトトギス聞くだけに来た山の宿

新居浜市 月原宵明

もののふのごと豆秋さん近けり

東京で近所が知らぬ棺を出し

夕涼み日比谷は政防法のデモ

有楽町女は「なま」のお替りし

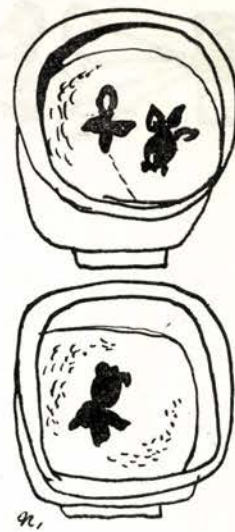
日本を論ず神田のガード下

江戸情緒ビルの裏手の御神燈

「晩酌」のひとときを

愉しむ

夕方、ラジ
オ放送を聞きなが
らいるつもりで読
んで下さい



石曾根民郎

(一)

夕方近くこのような時間に、お酒の話を致しますと、いつもより早く晩酌をしなくなる人もあるかも知れません。待ちかねた食卓にどっかり坐って、もう出そうなの

が出来ます。そして一家の団樂が自然とかもし出されてゆくことを考えるとき、つましやかな、そしてまた適度の晩酌というもののありかたはのぞましいものとなるのであります。

でもまた、夕飯ときにお酒の全くいらぬ方もあるであります。う。お酒に縁のない人が晩酌の話をされても、なんだつもらないとお思になるかも知れませんが、こんにちのところは、別の世界でもある晩酌という雰囲気は、どんなものであるかを知っていただく意味で、しばらくお耳をかたむけて下さいませんか。

一回、募集された「晩酌」そろそろ盆をかたむけることに致しましょう。ご一緒にとろりとした気分、作品も味わって貰いたいものであります。

一日の激しい労働、一日の商売のやりとり、そうしたあとの晩酌がどのように今日の苦勞を忘れさせ、明日への活力をうながすものか、それは大人でなくてはわからない暮らしの味であると申すこと

一杯やっておりますと、平素無

口の人でも少しばかりおしゃべりになるものであります。そばで聞いていると、ついこの間も話したことなのに、また始まったとにやにや苦笑します。でも本人はいって真面目に、これが初めてだと言わんばかりに話しかけるので一層おかしみが出ます。そんなとき、お父さんはお人好しだなあとしみじみ思ったりすることがあります。

晩酌に酔えないわけは妻が知り

紫苑

いつもきまった時間にきちんやり出す晩酌、頃合いに何となく酔ってくる父の御機嫌が今日はありません。子供たちはそれと知って不審な顔をしております。どうしたのだろう、気分でも悪いのではないかと頭をかしげます。父の顔をそっと見なくなる。でも奥さんだけはその訳を知っています。

長い間くらしで来たカンであります。今日少し商売の方で思

わしくいかなかったこと、或いはまた職場でちょっとしたトラブルがあったこと、そんなことにこだわってお父さんがいつもの晩酌がうまくなく、酔いの廻りがおそい。ちよつとしげこんだ御主人の横にいて、元氣付けるように酌をしてあげる奥さんの気分も嬉しいではありませんか。

生き甲斐は晩酌父の老けもせず

丁二

定年になって父は長い間の仕事から離れて悠々自適している。ほんとうに長いあけくれであったとみんな思っています。定年という言葉だけを聞いてすっかり老い込む人があると言いますが、たのもしいにうちの父はそんな様子もなく、庭いじりにまた暇を見ては家庭の仕事に手助けをしてくれるほどに達者です。それから、家中安心しております。あまりやらないで晩酌も、定年になってから少しづつたしなむようになり、なめる程ですが健康法のひとつと自画自賛しております。本人もそうでしょうが、はたのもの、父のこれこそ「生き甲斐」、そう思い、いたわるように見守ってやっております。こんなところに晩酌のたのしく、そしてまたたかな暮らしの夢を持たしめる役目があるものと思われま

る

もう一本お代わり、そうは申しませんが、から徳利を目よりも少

し差し上げて黙って振っていただきます。今日はほとんど嬉しいことがあったのか、話題も豊富に、食卓で御主人は大いに御機嫌です。子供たちがウマを合わせるようにして、相槌を打つものですから、父は余計はしゃいでいるように見受けられます。自然と晩酌の数もいつもよりふえているようで、そのたびに立つ奥さんの方も、今日は少しやりすぎたのではないかと思います。もうこれでおしまいです。よと、徳利の数をやんわり睨んでお代わりをしてあげる奥さんの心得た表情が手にとるように見えます。

晩酌へ一家の明日をねだられる

一男

無駄に盆をかきねるのではありません。今日の無事であったことを感謝し、また明日のために祝福あれと祈りたいような気持は実は一家の者、特に奥さんにあるのであります。それを「一家の明日をねだられる」とひねって見た作者であり、その作句的な言葉の技法が生きているものと思われま

「明日をねだられる」明日もまた健康に動き、働いてゆける身体をねだられる男も本懐というべきでありましょう。明かるく力強く明日をねだられてゆきたいものであります。

次にこれらと思われる作品を挙げてまいります。それぞれ鑑賞していただきたいと存じます。晩酌が切れて気のない父の

顔 勝海
晩酌の父のおのろけ聞いて
やり 王堂

晩酌に明日のいのちが生き
ている 青蝶

晩酌へ溶く風景のなかの汗
よ 歩星

晩酌の肴嬉しく子に食われ
元春

晩酌へ見倦きた女房また坐
紅苑

徳利を振って晩酌飯にする
越山

晩酌があるから急ぐ帰り道
久仁子

はっと一息入れたところで、ほ
どよいお燗のつくときにまたお伺
い致しますよう。

(二)

この前につづいて今回募集の
「晩酌」川柳選評であります。こ
の前の発表をお聞きになりました
か、それともお聞きのがしになり
ましたか。川柳はどのように詠う
ものであるか、どこを擲んでゆけ
ばよいか、そういうところをこれ
からも一緒に考えて見ようと思
います。そしてこれからの川柳の
新しいねらい、詠いかたの工夫、
言葉のあや、表現の迫力、そうい
ったものを追究してゆかねばなり
ません。新しい時代には新しい作
品がうまれて来なければならな
い筈です。古くさい概念、古くさい
着想ではついてゆけません。しっ
かり現実のうえに起って、いのち
あるすぐれた作品をつくり出す氣

がまを常に持ちたいと存しま
す。

今回の題は「晩酌」で、この前
につづき気分の良いところを見は
からって、ご一緒に川柳のなかに

あらわれた晩酌風景、いわば家庭
スナップのたのしい雰囲気味わ
いながら、作品を鑑賞してゆきた
いと思います。

では寄せられた作品のうちから
拾ってまいりましょう。

晩酌が今日一日をしめくく
英雄

しずかに一杯かたむける気分と
いうものは、心ゆたかにおちつい
た今日のしめくくりであることに
思わせます。殊に家族と一しよに
顔を合せて談笑のうちに盃を口
にするとき、一日の苦勞もふっ飛
ぶようであります。商売のやりく
り、なかなか大変ですが、今日始
まったことではありますせんけれ
ど、一日一日をなしてゆくと、い
り仕方はあります。なしとげて
ゆくことが生きてゆくもののなす
べき当然のわざであると知ったと
き、フットがうまれ、甲斐性も
出るといふものであります。この
作品でわかるように、たとえば晩
酌というひとつの家庭でのやすら
いのしぐさによって、今日一日の
しめくくりをつけてゆく、そのこ
とだけで今日の無事に感謝し、
明日への元氣を踏み出さざるを得
ません。今日だけでなく、明日と
いうことをも踏まえたところにこ
の作品の意図が光っております。

晩酌に独活あり妻はありが
たや
晩酌だけで肴とかつまむものは
何もいらないうえに世話のから
ぬ飲み手があります。また反対
に、お酒のつまみになかなか面倒
な人があり、おさかなにしめて
も煮たものは好まず、焼いたもの
がよいとか、いろいろ文句をつけ
たがる人もあります。それぞれ趣
向はあるものであります。とやか
く申し上げられませんが、奥さん
はそこをよく心得ていて、まずシ
ュンのも、季節の真新しいもの
を食膳に供することがお酒のつ
まみに最もふさわしいものだとい
う点を知っております。この作品
のように、うどにちよつと味噌を
つけて丸かじりなどは、乙なもの
であります。晩酌をほどよく生か
してくれましょう。それこそ此頃
よく聞くありがたやありがたやで
あります。

晩酌の膝へのせてる孫の顔
実茶

これは好々爺で、孫を膝にして
一杯やっているおじいさんであり
ます。目に入れても痛くないとい
われるほど、孫は可愛いようで、
晩酌をしていますと、「おじいちゃ
ん」と声をかけて膝にもたれか
かります。いつしか膝に抱かれ
て、ときどき酒のさかなのつまみ
食いするほどですが、可愛い孫の
こと、少しも叱りません。頭を撫
でております。習いたての歌をう
たう孫のいじらしい恰好、おじい
さんは相好をくずしてたのしい酔
いが廻ってゆくように思われま

す。
ところでこんな句がございまし
た。

晩酌の宿の一人に遠蛙

着想、思いつきはよいのです
が、表現、あらわしかたにちょつ
とがたいところがあります。動き
がないということ、人情的な川柳
独得な感じが稀薄であること、そ
うしたところを一枚二枚とりのぞ
いて作り直しますと、よい作品に
なることと思ひます。

次に今回、入選のふたつの作品
を発表致します。

晩酌に男手何かききで来
米一朗

男世帯の気安さか、それとも奥
さんが相憎留守だったのか、そん
なときに友達が突然やって来たも
のと思ひます。

小児科・沢田医院
沢田四郎作

大阪市内西成区玉出
本通り一ノ三
電話 二九一三

・暑中お見舞・

のと思われまふ。独身なら手馴れ
た恰好で、奥さんが留守のときの
男の人ならそそくさとお勝手元
に行つてまな板のうえで、ことこ
とと世帯じみた音を立てて何かき
さんでおります。晩酌のつまみに
するのであります。いつもと
違つた気分、その気分がこよなく
嬉しく、友達をちよつと待たせ
ながら何かこしらえる、そういう

た男手の手料理と晩酌をあしらつ
た着想が奇抜で、そしてまた変り
栄えのした対象をねらい成功して
います。

晩酌へ浴衣の糊の肩いかり
由湖

夏にふさわしく、小さくぱりし
た浴衣に着替えて、どっかり坐つ
て盃をかたむけています。糊がき
いていましてその浴衣の肩の
ところがさも怒つたように、つんと
しております。ほほえましさがあ
りかた利用していますし、また御主
人思ひの奥さんの気持がジーンと
くる作品。

そのほか気付いた作品を挙げて
まいります。

晩酌へ余生の顔をあたため
弘佳

晩酌へ今日を忘れてのむあ
ぐら 喜代志

晩酌は明日のブランの向き
泉翠

晩酌で足がふらつくいい生
活 笛人

晩酌は二合徳利を恋しがり
覚男

おつかない父さん一本で寝
かされる 白花

よい時を待てと晩酌に励ま
され 静園

晩酌に亡き父の癖真似て見
せ 静園

では今日もたのしく晩酌で御苦
勞をいやして下さい。お元氣で。
さようなら。

(筆者はNHKローカル放送
大阪府文芸川柳選評委員)

びっこの犬

の文学



高須啞三味氏に答う

東野大八

びっこの犬は、私の前を横切ろうとした。こちらを向いてくれるな、立ちどまってくれるな、という私の気持を見抜いたかのように、犬は意地悪く立ちどまった。私とは五メートルと離れていなかった。

犬は後股のひとつを上げて楓の木の根元に小便をひっかけた。上げた片足が、足首のない短い足だったことに私ははげしい屈辱を感じた。しかも、犬の視線は、私の方に向けられているのである。その視線には、同病意識がこめられているように私は思った。

糞尿の用を足すときの犬は、その眼に哀れっぽいひかりを宿しているものだ。後肢を一本高くあげるといふ習性も悲しかったが、その眼の訴えてくるひかりはもっとやりきれなかった。

衝動にかられた。その石が私自身を傷つけ、ステッキが私をうちのめすであろうことを身にしみて感じながら。

だが、私は、びっこの犬に向ってなんの動作も示さなかった。私は、犬の存在よりもあたりの人の眼を気にしていた。びっこの犬とびっこの人間—この奇妙な取りあわせが、五体満足にそろうた人の列に哀れがられるのもイヤだった。犬だけがびっこの故にびん笑を注がれることも許せなかった。このことは、人間の不具者同志の場合も同じだった。愛憎相反—。だが、相手が羞恥心や劣等意識をもたない動物であるだけに、びっこの犬に真向うときは、負担が倍になってかぶさってくるのである。

これは僕の友人、平光善久が「新潮」六月号に書いた「びっこの犬」の文中の一節である。平光は、戦争で右脚をつけ根から失った、僕同様の戦傷者である。戦後、彼はこのような感受性

の強い生き方で、生きてきたのである。羅漢ながらのエネルギーが、彼の神経は以上のようなあんばいで、その文意が行きとどけば行き届いていくほど、僕としてもやり切れないのである。びっこの犬を眺めている彼を、僕がまたその彼といじけた動物を見くらべる側に立っている。

高須啞三味さんが、本誌四〇六号に「不具川柳について」と題して、不肖の僕に与える態の一文を書かれていた。非常に感銘深い文章で、僕個人の気持の上では大いに有難いことだと思った。同じ不具者同志でわからないような心づかいも感じられて、ついホロリとなったりした。

啞三味さんは、老後の域に入られて、不慮の災厄のため、とりかえしのつかない不運な人となられた。その生々しい実感が、身近な事件だけに、直接的な意味合いで、僕の拙文の一つ一つに共感と同情を感じられたのであろう。読んでみると、その啞三味さんの文章の中に、啞三味さんご自身の感傷が測々と生づいて感じられた。

正直に言って、句の上では啞三味さんの方が大先輩である。しかし、不具の体験は、僕の方が十年選手である。(あまり偉張ったことではないけれど) 句と同様、かたわも年が入ると、それ相應の人生観なり諦観をもつようになる。その引くるめたものが以下のような具合である。

さを見てつねづね大いに同情し、大いにいたわってくれていた。ところが、ある日突然に彼が松葉杖をひいて現われた。しばらく見ない、と思っているうちに交通事故で、彼は大事な片足を根本から切断してしまっていた。空っぽのズボンの片方をふらりとさげて、「やあ—」

と元気に彼はいった。僕も手をあげそれに答えて「やあ」と言った。いいが、あとが続かなかったのである。彼も僕の眼からその身を隠そうとしている風がみえるし、僕も僕で、以前の交友が交友だったものだから、その肉体的なあまりにも変貌のために、それまでのように気軽くついてはいけなくなっていたのである。片輪も片輪同志になると一種のたとえ様もないやり切れないさが、おたがいに伏在していることは確かだ。それは一休何ものであろうか。

僕の社の新聞に「白い乞食」と題するコラムを書いた。翌日、白衣の物乞いをやっている元軍人と称する手足のないのが五、六人、えらい見事で社に乗り込んできた。

「これを書いた野郎を出せ」とその新聞を丸めて机をたたき—同ははじめからけんか腰だ。騒いでるな、と感じながら、手許の仕事に一区切りをつけ、僕は彼等の待つ衡立の向うへ出た。気負った眼が一斉にこちらへ集ったが、僕の空っぽの片袖をみると、いきなり空気のぬけた風船みたい

肝疾患・疲労・二日酔

★総合強肝剤



リポクール (12種の成分を配合)

20錠・50錠・100錠

用意された抗議の一つづつが一人一人の口からはき出されたが、もはや一同は闘志をすっかり失っていた。

こちらは、こちらでそうした一同を眼の先にして、なぜかものという氣力を失っていた。

いわず語らずに—それが不具者同志の冷たい哀感なのである。

僕は、啞三味さんの一文を眼にしながら、いわず語らずに、その哀感がぐんときて、正直なところ、折返しの一文がどうしても書けなかったのである。

むかし、啞三味さんも言われたように、不具者の文芸は、しよせん不具者の中のもので、良識の殻の底からはあまり引き出しひけらかすものではない、僕はいつもそういう氣持を抱きつづけながら、びっこの犬のように卑屈な—のである。



千句の壁

直原七面山

句の歴史

近作柳碑

第一句 素裸にされて邪恋の夢が覚め(三三年三月号)

第十句 スクリーン一杯のキッスに声なし

第四十句 否応を言はずキッスして欲しい

川柳塔

第八十句 一年目やっともらったキッスなり

第九句 欲情の燃ゆる女体の蛇に似て(二四年十月号)

第二百句 未亡人鏡へ塵を溜めて生き(二五年四月号)

第三百句 にじり寄る娘心のいじらしく(二六年二月号)

第四百句 接吻は未熟な桃の味に似て(二七年四月号)

第五百句 春うらら恋の奴かそれもよし(二八年六月号)

第八百句 金になる恋はないかと欲深が(三一年七月号)

第一千句 九十九の祖母のお風呂に氣を使い(三五年八月号)

第一千五百四句 申しわけにそこだけ隠して水着ショー(三六年六月号)

悲願「千句の壁」をついに破ることができました。思えば長い年月でした。月平均六、六句が路郎選にはいったわけです。

私は川柳不朽洞会におけるいわゆる不在地主ではなくして、勤勉な小作家でした。

ひと月といえども投句を休んだことがありません。

したがって、この長い年月にわたって培かれた小作人根性は、終生変ることなく、来る日も来る日も、コッコツと川柳の畑を耕しつつけてゆくことでしょう。

雨にもめげず風にも負けず汗水流して。

この間には、実にいろいろのことがありました。自ら進んで、あるいはまた、各地の川柳会から招かれて、見知らぬ町や村へ赴いた思い出の旅の数々。

柳話を頼まれて東奔西走。時にはまた随筆を書き柳論を展開し、地方柳誌にチンパンカンパン句の排撃文を書いて、心ない柳人どもからコテンコテンにこきおろされたり、岸本水府氏の新聞句評がなっていないといつては噛みついてみたり、川柳作品向上を願って、見戯にひとしい課題吟は速にこれを廃止して、川柳本来の創作吟にかえれと声を枯らして、課題吟全廃論を唱えて走り廻ったり、興がのれば親しい柳友のたれかれの区別なくとらえて、夜を徹して大論戦をたたかわしたことも、年に二度や三度ではありませんでした。

しかし、なんといっても、特筆大書すべきは、川柳弓削文部を守って孤軍奮闘の巻であろう。一千句の中には、つきぬ思い出を秘めたなつかしい句もいくつかわります。

句は私の心のふる里であり魂の詩であります。句は多情多感な私の生活の記録であり生活の詩でもあります。

しかし今、それらの句の持つ過去のいろいろのできごとによれて無為な時間をすごそうとは全然考えておりません。

私の目の前には、ぜひとも越えなければならぬ「二千句の壁」「三千句の壁」が、厳然として控えております。

私はその壁に向って、黄昏近いこの初老の身と心に、奮起の鞭をあてながら(果てなく限りない)川柳探求の、柳魂錬磨の旅をつづけて行かなくてはならないのです。

道はあくまでも険しく、風雨を孕む嵐は烈しく吹きつけて、可憐いこの身を容赦なく痛めつけることとあります。

が、しかし、壁がいかに厚くとも、道がいかに険しくとも、私はこの苦行の旅を決して中止しようとは思いません。

なぜなら、私はなににもまして川柳を愛し、誰れよりも川柳に惚れ、生れついての川柳気狂いでありますから。

「句集を出しては。」といつて進めて下さる柳友も幾人かはありますが、それはまだまだ先のことだと思っております。

だれもが一度はとおったであろう「千句への道」。だれもが一度

は必ず破らなければならない「千句の壁」を、曲りなりにも無事パスすることのできたこの喜びを、ここにこうして、川柳誌上をとおして申し述べることであります。これはほんとうだがなんといいっても、路郎先生をはじめ、諸先輩ならびに柳友諸賢のお導きであると、私は心から感謝の言葉を捧げる次第であります。

一千の句をとおして特に私の感じますことは、昔作った句の方が、同じ自分の作品でありながら、昨今のもより数等秀れていのように思えてならないこととあります。

あの頃の句には、(川柳界の田村泰次郎をめざして大活躍をした昭和二十五、六年頃)確に驚くばかりの迫力がありました。

読む人をして感動せしめずにはおかぬ魅力と、共感させずにはおかぬ輝きと魔力を持っております。

それはいまと違って、生活になんの不安もなく、あらん限りの情

熱と持てる全ての余暇を川柳一途に注ぎこむことができたからかもしれません。

いまの私は、あの頃の私に対して、「ほんとにお前はよくやったよ。」といって、自分で自分を褒めてやりたいときえ思うくらいです。

いすれこの一千句については、これを、愛情の句、キッスの句、乳房の句、未亡人の句といった風に、それぞれ分類収録して、川柳研究資料の一部にしたいと思っております。

またロマンスを秘めたそれぞれの句も、これを小説化してご披露できたらと、目下鋭意構想を練っているところであります。

例えば、未亡人一度落ちれば滝に似て汚されたといわず女になりましたなんて句は、案外面白い「川柳小説」になるかも知れません。

中島生々庵

大阪市南区饒谷仲之町二〇

若本多久志

西宮市津門西口町五〇

松江梅里

大阪市阿倍野区松崎町三ノ一〇

伺御中

暑

蝶光 文野 井林 土野 丸尾 潮花
大阪市 豊中市 香取市 大阪市



評句

リレー

猫だったのか誰も返事せず
香林 文蝶—七八型で眼の不自由な句

主の生活の中から生れた句で、自然の儘を句にした無技巧の句でしよう。いちおうそのままで良い句だと思えますが上句に対して、下の句は何か既製品を組み合せたと、言う様に感じとれるので、「誰も返事せず」が気になったんですが、読み返して見ると、これは句主のするどい勘で詠んだもので「猫だったのか」は自問自答をして「誰も返事せず」と結論して居るので句としては、まとまって居ると思えます。

魁光—一般家庭でよく見当る状況で私達もこんな実状に度々接する。氏の生活上の実感的句と云えるでしょう。私もいい句だと思います。七八型の句で最初何か少し物足りないと言う気がしましたが、繰返し読んで見るとそうではない。

素身郎—魁光さんの言われるように、一般の家庭でよくある状況です。しかし、よくあることではありますけれども、私達では、なかなか句にならないのではないのでしょうか。聴覚を最大の頼りにして、事物と接している句主でなければ生まれにくい句だと思います。七八型は、そうした句主の感覚で生まれた句にふさわしいものといえます。

潮花—句主が香林さんである為に聴覚のみからの句として見ていられませんが、香林さんと言う作家を知らない、多くの川柳人が読ま

れた場合の句として考えて見たらどう受取るかと私は先ず思います。下八の止めは、誰かが来るのを待つ人なればやるせないことを、忙しい人なれば人の来ないことをホッとするだらうし、その人、その人の心境にもっていつて考えるでしょう。「誰も返事せず」の止め方は幾多の川柳家が読まれても、又それ以外の人が見られても、その人、その人の心の中に何かを残している味のある句だと思われる。

文蝶—この句は作家を知らない人が読んでも解ると思いますが、何か生活内容に淋しい孤独感と言うものが感じとれるのではないかと「誰も返事せず」の止めが、その様に解釈も出来るでしょう。素身郎説に同感、潮花さんはこの句から多くの人々がどう受取るかとの説ですが、下八からは色々と考えなくても良いのではないのでしょうか。間口の広い句ですが、奥行はたいしてないと思えます。

魁光—私も同感です!! 潮花さんの言われるように私もこの句に誰か人の来るのを待っていると言ふふうにも一応考えて見ましたが、そこまで深く考える必要もなかった。却って、「ああ猫だったのか」と軽くあつかった方が七八型の句としての妙味があるのではないのでしょうか。

潮花—句の見方にはそれぞれ読まれる人の心境とか環境によって

変ると思われる。一つの句をひどく感情的に見る人とそれはど胸にこたえないと思う人があるでしょう。私は魁光さんの言われる様に、ああ猫だったのか、とただそれだけの様に思えない。何となくわびしいものを覚えさせられます。

○ 客は恋と思いい女はファンと
思ひ 喜山

文蝶—表現が一変するなあと感じる、内容はどこにでもあるケースで、男女とも自分の都合のよい方へ解釈したがるものです。スタンドかバーか、あまりサービスが良すぎると客はすぐに自惚れて恋だと思ふ。この場合の客は複数を現わして居ると思ひます。一人なら「男は恋と思ひ」としないと弱く感じがします。

魁光—第三者から眺めての男と女の勝手な自惚れをまとめた句でそれ以外を追求するべき所がないし、句其の物に感動性がないと思ふが如何。只この句は破調によってのみ救われているのではないのでしょうか。

素身郎—たしかに破調によって救われているといえます。感動が薄いのは、第三者から眺めての句だからだと思います。当事者側からの句にすると、もっと面白いものができると思ひます。

潮花—皆さんのお説通りまとめ方が変わっていると言うだけのもの

でしょう。男性も女性もが持っている共通の自惚れところを、第三者から見てもとめただけのもの。お互に男も女も自分に都合のいいことを考える人間の弱さと言うものを言つたまでのこと。客と言うからにはファンと言うより、肩いれさんでしょうか。

文蝶—俗情を露呈した「おかしみ」の句で句調の軽快さと、表現の、奇抜さに救われているのであって、感動性がないと言う事には同感。川柳味のある川柳と言えるでしょう。

魁光—やはりもう少し何か足りない所謂焦点のない句と言えるでしょう。表現の軽快さに依つて救われてはいますが。

潮花—当然な自分勝手な考え方を句としただけ皆さんのお説通りと思ひます。

○ 掛取りに行くのに女將注射
をし 一十

文蝶—本商売の女將今日はねばって、どうしても貰って帰らな店の浮沈にかかわる、そんな意気込みで注射で元氣をつけて出かける、只それだけの事。この「掛取り」の用語下の句の「注射」と思ひ合しますとそぐわないと思ふ。この場合なら集金とした方が良くはないか。

魁光—注射をして迄掛取りに行くと言う事は一般常識では考えられない。女將が病人ならそうした

状況もあり得るが、店の浮沈にかかわるので注射で元氣をつけて行くと言う風には私は取り度くない。「注射」は句を誇張する為めにくっつけた表現のように思われるし、中七の「行くのに」も冗長であり他の表現に変えて下五に持つていっても句意としては変りないでしょう。

素身郎「注射」は、表現がややオーバーの感がないではないが、ませんが、注射をしてまで掛取りに行くということが、常識では考えられないとは思いません。

現在は、やたらに新薬が出回り、やれビタミン錠だ、強肝剤だ、ブドウ糖だ、どこもわるくないのに薬を飲み、注射を打ってもらう時代ですから、ちよっと集金に出るにも、注射の一本も打つということは考えられます。

文蝶さんの言われるように、「掛取り」という古い言葉と「注射」という比較的新しい言葉とが、そぐわないので「注射」がオーバーに感じられるようです。私は、面白い句だと思います。

潮花「掛取り」と言う言葉は皆さんの言われるように古い言葉であり、妻を女房と言う読み方に何となく古いと言うより読んだ時にいや味がありますのと同じこと、この句の場合の注射と言うことを色々問題にしていられますが、集金と言うものは、なかなか取りにくいもの、つい向うの出力で興奮をしようということが多いことを思

い合せると病氣と言うための注射ではなく血圧をおさえるために先ず注射をして出かけると考えられる方が適当ではないかと思う。

「注射」は誇張した大きく言い過ぎていてる感じもありますが、この場合それほど問題にしくなくてもいいのではないのでしょうか。この句の欠点は語調が悪いと言えそうです。耳で聞いた場合又活字を見た場合とも、また「し」止めも感じをこわしている。

文蝶「この場合は病人ではなく掛取りに行く、どうしても取って来ると言う、意気込を注射によって誇張した、表現であって、実際に注射をして行っても、不自然ではないでしょう。そう言う場合もあり得る事で「行くのに」は燈光説同感、柳多留三編に、「大三十日首でも取って来る気なり」

「首でも取って」が誇張で参考までに。

魁光「どうやら一度これでまともになっていると言う皆さんの御意見のようですが、どうも「注射」は氣になりますね、「行くのに」と言う比較的無駄な語句と共に私には戴けない。

素身郎「私がよくこのような表現をするためでしょうか、「行くのに」という語句にそれほど抵抗を感じません。

潮花「掛取り」と言うものの意気込みを言っただけ、私も商売をしていたころには、一日や十五日や

と言われて腹をたてて喧嘩をしたものです。

ただひとつなれば胡麻でも埃めく

文蝶「一粒の胡麻を取り上げて句主の主観で「埃めく」とまとめた句と思うが、「ただひとつなれば」が冗長、こう言う場合も想像するんですが、食卓の飯の中に一粒の胡麻を見つけた、拾い出して見ると汚たなく感じた、そこで「埃めく」と表現した、この句字余りで間延びのきらいがあるので十四音字位にまとめると良いと思

う。

魁光「埃とは一種の小さなゴミであって複数であると思う。ただひとつの埃とは若干矛盾を感じ。茶碗の中の埃とは受取れないし又机や畳の上の一粒の胡麻と観るのも変だと思われし承服出来ない。句その物を散文化しているのではなからうか。着想は実にうまい所が欄であり今一步推敲すれば文句なしの句が出来上がるのではないかと私は思う。

素身郎「着想はよいと思えます。ただ、魁光さんの言われるように、一般的には、「埃」といえば「飛散する微細なちり」即ち砂埃のようなものの意味にのみ解されておりますので、(勿論「埃」の中には、ゴミという意味もあります。ですから、「ただひとつの埃」というのも誤りではありませんが)庶民文学としての川柳は、

やはり、一般の人にわかりやすい言葉を使うことが必要だと思います。この点この句の「埃」という表現は、一考の要があります。

潮花「ひとつぶでも、二つぶでもいい、が川柳として見ると味のない句「ただひとつぶなれば」と詩の一行のように美しくして見ただけ、皆さんの申される以上のことは何もない。胡麻を何とか句にして見たいと句主は考えられたのだらう。通りいっぺんの味の無い句で終わっている。

文蝶「詩的表現によって川柳にまとめた句、胡麻と言う素材を卑俗さのない用語で観念的に言い切っているだけ、「着想はよい」と言う事には同感。

魁光「一粒の胡麻の見方をなんとか変えて見るとどうか、このままだと味のない句になっている、「ただひとつなれば」の詩的表現も考えさせられる。

潮花「魁光さんの言われるように何とかもう少し川柳としての味がはしかった。豆秋さんが作句されたら川柳の持味を生かした面白い句が出来るかも知れないし、文蝶さんの言われる様に一層、十四字詩にした方がいいようですね。

とっくり思案しとけと飲み

和三郎

文蝶「男の肚は決まった、しかし女にも考える余地を与える為飲みに出た、「飲み」は「飲」だから家庭の不和ともとれ、相手が女と



光タクシー株式会社

大阪市西淀川区御幣島中二丁目四番地

電話 47 0923 番
0927



宝タクシー株式会社

大阪市福島区今開町二丁目

電話 此花 16 1279 番
4440

道草

砥部の土ひねり其他

麻生路郎

現在、日本には一都と五百六十市があり、それらをボツボツ取って見ようかと思うて居ります。大抵は言えども日本を見直す旅という事になるでしょう。しかし、インスタント嫌いな私のことですから、いつまでかかかるか予測は出来ません。出来ればのんびりと、出来るだけ道草を食いつながりながら出て見たいと思つて居ります。それに、これを果すためにはすくなくならぬ経費と時日を要するので、好意ある、スポンサーの出現が望ましいなかと随分出のいことを考えて居ります。では、全国の皆さま、愛読者の皆さま、ソロ出かけることにいたします。

道後へ

スタートラインは七月一日の十五時二十五分に伊丹の大阪国際空港でしたが、着陸地は香港ではなく、松山市でした。一行は女医さんの仙波杏子女史、附添いの老妻豊乃と小生の三名。疲れたさまもなく、ロケーションにでも来たように、第一は砥部の土ひねりで、第二は狸通氏に会いたかったからです。第三は宇喜多翁の寿像の行方を見とどけようと言うのにあつたのです。

杏子さんは砥部の出身なので、私の下手な芸術欲を充たしてやろうと、かねてから計画されていたのです。エヤーボートにさつそうとおり立ちました。各地では集中豪雨で悩まされていと言ふのに、一雫の雨もありません。そこへタヌキ通で知られた道後の富田狸通氏の出迎があり、ヤァヤァと握手。プレスやラジオ記者が出し抜か

れた潜行の旅に、富田氏ただ一人の出迎えはけん族さんの神通力で知つたのだらうと早合点をしてもらつては困るのです。こん度の旅はそれが、突然実現される運びとなつたのです。杏子さんから「奥さんも一緒に」と、お誘いをうけたのですが、

「船はイヤ」と、絶対に承知してくれません。

「では、私ひとりでも」

と思いましたが、美女美男のアップクでは、帰省される女史のご迷惑は言うまでもありません。

「わたしは九月頃まで、郷里に残りますから、センセイのお帰えりが、おひとりになられますから、ぜひ奥さんに行つていただかないと……」では飛行機はいかがです

か

と言うことになりました。

「飛行機だったら」

と、勇敢マダムがたちどころに応諾。それこそ、豊乃女史四国横断の号外でも出してやりたいほどの開闢以来の出来事でした。

そこで松山エヤーボートに着いた私たちは杏子さんとこから差し向けられた自家用車で道後鷹谷の国際観光旅館川吉別荘へ落ちついたのであります。杏子さんは、そのまま砥部へ向われました。

私たちは夕食後、道後温泉前の

趣味の店「狸のれん」へ狸通氏を訪ねましたが、不在だったので、何十年振りに狸通夫人に会つて話しこみました。

砥部

翌二日、朝から砥部へ出かけました。重信川を渡ると砥部です。ここに架つた長くて立派な橋は四国でも一二をあらそう橋だそうです。砥部は何れ松山市に合併されるのでしようが小高い山で囲まれた景色のいいところですよ。幾つかの村集が集つて砥部町となっています。

杏子女史の家は町の中心地でした。妹さんも美しい女医さんでした。ここでビールをいただいたてから、町の産業館へ案内され、砥部焼の見学をいたしました。

砥部焼の古い参考作品や現代作品の多くが陳列されてありましたが、どれ位の値うちのものか判りませんでした。私はあまりにも技巧のかった作品は好みません。これは砥部焼に限った訳でなく、九谷やその他にも言い得ることです。その苦心、その努力には敬意を表しますが、(真似が出来んという意味で) そうした技巧的作品は私の心を打つには遠いものであるからです。

そんな訳で一ト通り見せていただいて、早々にそこを辞去し、土をひねらせてもらうために山田白水氏の窯へ案内してもらいました。

だいたい、適当な堅さにしたねん土と、制作に使用する幾つかの道具をあてがってもらい、自分の好みのものを作るのです。ズボン

断定もできない。また兄弟とも住込み師弟関係とも解される。相手が誰れでもよいとして見るとよい句とは言えない。

魅光―家庭の不和でしょう、とすると別れ話しても始まつたかな――どうも表現がちぐはぐで文蝶さんの言われるように相手を色々並べて観察すると全く平凡でよい句にならない。では如何に表現方法を是正すべきか全く損な句である。

素身郎―家庭での出来事と解しますと、下五の「飲みに出る」は、男の横暴をよく表現しているといえます。もっと真剣に相談し、奥さんが納得するまで話し合うということとせず、「よく考えとくんだな」と言い残して席を立ててしまふ。しかも酒を飲みながら家を出るというのは、男の薄情さ、横暴さを余すところなく言い表わしているといえます。しかし、この句が、いろいろなことに解されるのは、欠点でしょう。

潮花―この句の場合相手に女性として受取る方がいいのではないでしようか、妻であっても愛人であってもいい、とつくりと思案しとけと言うからには、何の話であるにしてもギリギリの線まで来ていると言えるし又飲みに出ると言うことが、男性の横暴とも言えない。そうした部屋の雰囲気の中で向い合っているのに耐え切れないために出て行くのであり、又自身自身の淋しさを忘れようと飲み

味のこー

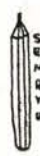
モダン 川柳

心 斎橋大丸北の辻 東へ

御 門

TEL 〇 6684

御集会には階上御利用下さい



行くこの酒は決して美味しいものとは思えない。気の弱い男なれば向い合っているのは余程苦しいと言えらる。相手は女性として受取つた方がよく川柳として見て損な句とも思えない。

文蝶―相手が女とすれば「飲みに出る」で男の非情さの感じられる句になるし、今の時代に、そんな女が居るようには受けとれない、句主自身には相手は判つて居ても、句を読む側からでは相手がばやけて仕舞うので一考を要する。

魅光―この句の全体を繰返し読んで見ると、やはり「飲みに出る」は男の横暴さがよくうかがわれるし家庭の妻と解した方がよい。それ以外に解される所にこの句の欠点があると言えらる。

潮花―句の観点は妻と見るべき

ヒゲそり後に…

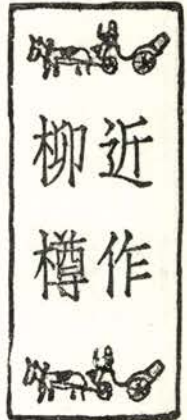
- 美容衛生剤G11
- アラントイン
- 水溶性ラノリン

配合

三日月

男性

アスリート



麻生路郎選
北川春巢選

わだつみの声は忘れてリバイバル 福岡市 田口 麦彦
ダンブカー来る殺し屋の^{ボス}に似て 同
都会とは黄色い帽子を子にかぶせ 同
ステッキガールの^ビ中年の瞳にせ^{まり} 同
齒車の一つとしての出勤簿 同
原稿の速度も金になる速度 同
弁当を自分で詰めて味気なし 竹原市 山内 静水
幸福は好いて好かれてかばいあい 同
貯ったろうと苦勞をからかわれ 同
ささやかな幸福牛乳がまめで飲め 同
本当の親切遮断機ためらわず 同
補聴器をかけて浮世へ癪を立て 京都市 大久保 和二郎
文化とは寺の敷地へダンブカー 同

西陣にて 三句

島原も祇園も知らぬ機^{ハタオリ}の音 同
昼休み糸屑つけて陽へ並び 同
西陣の息吹を染める川の色 同
あきらめがよすぎて出世縁遠し 高知市 須藤 俊江
レジャー^ムどこ吹く風と掃除好き 同
一人っ子の嫁だが別居云い出され 同
二十年前の着物を貰められる 同
あじさいへそそぐは藍の雨ならん 同
杖ついてまでも女に通いつめ 竹原市 杉原 愛場
つつましい母娘へ咲いたバラの垣 同
麦刈をするにも娘紅をつけ 同
パラソルの売場で女ボーズする 同
イヤハヤイヤ^ム「ドドンパ」有難や^ム 青森県 木村 涼人
バスト測らせ乍ら^{ハッパインガム}を噛み 同
すぐ汗になる生水で怖くなし 同
本業に穿く靴下は継ぎを当て 同
数本の髪になつて高くつき 貝塚市 護川 梢月
長病んで嫁かないままに更年期 同

暑中御伺

秋 月 宏 方 和歌山市今福東ノ町一二八	長 野 文 庫 今治市港町八丁目	高 橋 蟬 蛇 高知県須崎市吾桑小浜	長 野 井 蛙 山口県防府市大字西佐波 令字幸地一三一六ノ一六	書く隻手 汗は 流れるのに任せ	高須啞三味 東京都港区芝南佐久 間町一ノ五二武蔵庵	富士野鞍馬 東京都港区麻布宮下 町三〇番地の二	石川 侃 流 洞 下関市東向山町八五	那 谷 光 郎 加賀市大聖寺荒町四三	渡 辺 曉 童 愛媛県越智郡吉海町	榎 紫 光 愛媛県周桑郡壬生川町大 曲り・富士紡水源地社宅
-------------------------	---------------------	-----------------------	---------------------------------------	--------------------	---------------------------------	-------------------------------	-----------------------	-----------------------	----------------------	-------------------------------------



満ち足りた顔して立ってる妻楊子	同	週休の友を見ながら歎をふり	同
にっこりと笑って上がる手術台	同	浪費するつもり女は喫茶にて	香川果 三井 酔夢
ナイターは負け。夜汽車立ち続け	兵庫県 常岡 孝風	やけ酒をいたわる様に女将つぎ	同
思い出を淡谷のり子のうたに噓せ	同	知情意が分離して行くよろめけず	同
シミーズもあらわ真夏の米を磨ぎ	同	祭壇の花輪の裏で通夜の酒	兵庫県 河原みのる
商人の眼にロータリオンも	京都府 都倉 求女	束帯やころもが金になる免許	同
親戚も素通りさして観光バス	同	田圃へは出なや出なやと仲人が	同
春風になぶらせたままの釣の竿	同	釣り橋がゆれて愛情確める	玉野市 小谷 仙山
百姓の反抗あくびばかりして	兵庫県 遠山 可住	一年が早い人生下り坂	同
九十四で死ねば泣いてはく	同	円満な家庭が騒ぐプロ野球	同
軒下で稲を植えてる分譲地	同	お見舞の質問みんなネタ一つ	大阪市 花月亭 九里丸
医療費を稼ぐ仕立が夜をふかし	和歌山県 木下 一休	寝くたびれいろは送りをくり返し	同
自転車の尻へ産婆をこすずかり	同	アベックで蟹もはってる砂の丘	今治市 越智 一水
看護婦をけなし便器の世話になり	同	青春が砂丘で髪を泳がせる	同
ちと足りぬ女中相手も面白し	須崎市 高橋 蟬蛇	気の弱いのを代表に託びに来る	鈴鹿市 吉田 俊和
倍增へ時間ちぢめた按摩の手	同	パチンコの音は雨など気にもせず	同
貧乏はしても平和な声こぼれ	同	百田の涙をしほるメロドラマ	大阪市 山田 蛙水
瓜胡瓜三坪の畑が食べきれず	滋賀県 土守 蜻蛉	池の坊見せて楽しい新家庭	同
何が気にいらぬか胡瓜ひん曲り	同	剃刀のような顔して低姿勢	津山市 久保 延平

丸尾潮花

高槻市富田町七六七
日本住宅公団36号館
三〇四号

村山光輪

川雑淀川支部

大阪市東淀川区十八条町一ノ二

西森花村
坂田東洋男
志水礼司
早川清生
平田三十郎
小島孝夫
松下灯子
綿谷永香
木村水洞
武部香林
武部若菜

木村匡利

号水洞

匡余

大阪市東淀川区十八
条町一丁目二一

西 いわを

大阪市東住吉区桑津町
七ノ二二



東京のデモ在学の子を案じ	同	葬儀屋のガム噛み噛み橋建て	同
廁から月を褒めたらせかされた	兵庫県 北山 越山	ビデオどり作家も立会う午前二時	大阪市 谷町 互郎
禿ばかりそろって歌う枯すすき	同	ボートまであくびするよに宵の雨	同
民謡の峙へうたうバスガイド	岡山県 安藤 祥二	乳しぼる乙女もドドンパ口ずさみ	愛媛県 藤原 君子
袖カパー理想に遠く遠くなり	同	愛情を信じぬ男愛に飢え	同
世界旅行チンブンカンフで帰って来	ホノルル 並木東田楼	名著職さんと税喰う虫になり	愛知県 谷本鈍愚坊
ホノルル空港ハワイのご感想はと	同	里帰り姑のおならも報告し	同
盲判押すも此の頃肩がこり	出雲市 中川 晃男	天災をテレビで見てる応接間	仙台市 平野 光道
バラの香に男勝りをふと忘れ	同	なるようになると悟って眠くなり	同
えり元は顔をうずめて気をもたせ	大阪市 堀 風船洞	衣替急かせる様な雨蛙	青森市 三上 美路
どちらから手出し したかど 野暮な問い	同	退職に同僚別の顔になり	同
片想い占いばかりやっている	西宮市 鶴飼 鮎子	日曜はひなたの匂うふとん着る	愛知県 守屋衣里子
母入院		セールの桜へきそう試運転	同
痛まない手術だそうで一安心	同	選り取りですなと次男坊羨まれ	大阪府 見本 泉洋
片づける事が楽しい祖母がいて	大洲市 横田 放人	大の字になってレジヤを持て余し	同
一本の白髪に妻の手子供の手	同	お互いに旧姓訂正する再会	神戸市 波多野 美由起
ロバのパン聞き耳早い昼寝の子	高知県 山川 勝子	夫逝き針宅のみんな他人めき	同
パーマ屋はろくに ヒビ もして居らず	同	仕事より刺激の欲しい女事務	名古屋市 樋口 寿栄
百貨店トイレ程には売れていず	大阪市 山口 拳児	有名になって肩書ない名刺	同

暑中御伺

(ABC順)

支部 支野倍阿社誌雑柳川

事務所 大阪市阿倍野区松崎町3の10 電話 3935 (松江梅里方)

坂東若芽 伊達堰子 不二田一三夫 春田鎮海 橋田尚子 堀美智子 今西生瑩 金井文秋 片山光福 加藤繁雄 河井庸佑 木口賀峰 木村十悟 菊沢小松園 久米奈良子 松江梅里 小川恒明 坂上山椒坊 清水義介 新川博也 高川喜仙 辻川喜光 山本葉光

菊沢小松園

大阪市阿倍野区王子町
三ノ三四
電話 六六四四番

母さんで居る日の仲居洗い髪 大和五条市

尾米 絵見

口喧嘩子なし夫婦は猫のこと

同

湯の宿に素顔の妻の肌の色 愛媛県

河本南牛史

逗留を道後にしては若返り

同

煙草喫う画面へ煙草ほしくなり 和泉市

末田 晃康

商才はないのに資金借りあるき

同

エスカレーターにつけばついたで大売出し 大説市

本村 文福

吊皮につかまり本読む文化国

同

郵便値上げラブレターに支障なく 貝塚市

杉本 一鶴

妊娠中絶させた男をまだ信じ

同

恋してる女の瞳生きている 貝塚市

千石 快人

ぬか漬を出すのもベッド当番制

同

見るだけは只と買う気をおおる 宇部市

鎮浪 翠月

雷を恐がり親をなめており

同

髪洗うたびに男になりたがり 大説市

藤富 淀月

小僧から知れるのれんの左り前

同

ござっぱりした駅になり燕来ず 芦屋市

里田一十

鵜の咽喉を通った鮎を珍重し

同

胸を病む人とも知らず好きになり 鳥取市

近藤 昭夫

墮ろしたら次は双生児で生まれて米

同

金という字のみ眼につく情なさ 大説市

木村 草々

コンパクトくどけばなびく風情 同

同

立ち寄らば大樹の陰に今日も生き 松江市

岡崎 祥月

三万円なければなどと飲夫で居 宇部市

神田 豊年

若葉青葉携帯ラジオ歩いて来 倉吉市

渡辺 乱坊

大丸の横で山がら穆いで居 大説市

中村 瑞歩

中卒を三顧の礼で迎え入れ 堺市

武田軍治郎

つぼつぼは外さず自称名アンマ 愛媛県

村上 竹生

考えるだけで幸福ついて来ず 玉島市

井上 旭峯

しきいまたいでまで 松江市

岡崎 雪美

裏表あるぞと暗示する税吏 姫路市

隠岐 不醉

婦人役員余り自信のもてぬ顔 奈良県

木村よしを

かもめ舞う中を門出の船は行き 守口市

西口 竹志

狩り出されました仲間もまじる 津市

嶋野ひろし

バスガイドバックミラーで化粧 岡山県

久戸瀬春光

ポルナスの予想では恋の旅も出来 泉大津市

高津 紡毛

小雨でも記念とカメラに立たさ 大説府

中岸 雄水

井戸水を手杓で飲めば里の味 守口市

樋口 一峯

西田 柳宏子

大阪市阿倍野区
北畠西一ノ二八

暑中御見舞申上げます

川雑玉造支部一同

川柳雑誌社玉造支部

栄子
一清
出田
西酒江口証券
金泉萬業大阪市東淀川区淡路
本町二ノ六八九

ストリップパーカーテンして厚化粧 神戸市

吉田 隆

子の転動遠くで父母が語り合ひ 小松市

月田北海坊

耕転機横目に牛のネリを喰み 笠岡市

出原 真奇

四カ国語話せる長女嫁き遅れ 松阪市

羽根伸太郎

汽車値上げラッシュアワーはまだ続き 布施市

坂上山椒坊

おえはんは反抗期から脱け切れず 富田秋市

浅川 八郎

面当ての声がはつきり壁をぬけ 見島市

伊丹柳瓢子

大道の猿は耳打ち多過ぎる 大坂市

萬代句念坊

魚屋の電話やっぱり生臭し 七尾市

松高 秀峰

皺くちやの札で借金返しとき 神戸市

岩井 千甫

肺病も石切さんに願をかけ 大坂市

川口 弘村

人生の曲るたんびに酒を飲み 八尾市

吉田 博一

共稼ぎの台所は葱が芽をのばし 神戸市

松島 光一

倅は遠く嫁にも氣を使い 布施市

橋田 尚子

誤字当て字これで恋文書く度胸 大和郡山市

松本 峰水

託児所へ預けてまでも共稼ぎ 茨木市

高木繁太郎

外人の客に手真似がようもうけ 兵庫縣

斎藤たけお

国訛り遠慮なく出して県人会 八尾市

片山 光福

米ソより野球の順位気にかかり 大坂市

北村弥次呂

アイシヤドウ女を夜の顔にする 宮崎市

野口卯之助

叱られた記憶老師の死を悼み 八戸市

狛守 和穂

信仰は他力信ぜず寺詣り ハワイ

宮政 周防

鎌先きの泥懐しい歳となり 石川縣

三宅 ろ亭

記念写真やっぱり眩しそうに撮れ 笠岡市

松本 忠三

新道路もうトラックが喚ぎつけた 大坂市

中江ゆたか

売名へ口だけ笑うたプロマイド 岡山縣

田辺 好女

全て貧に因するわが思想 勝田市

飯野仙台子

さよならのきつかけを待つ立ち話 天理市

湊 町子

隣席もお義理の券で来たらしい 大坂市

沖田 詩朗

障子の棧指でこすった不機嫌さ 三重縣

安田さだお

いつ浮気したのか雑種の仔が生まれ 大坂府

吉川 朝風

人気とはきのうの歌手をもう忘れ 京都市

荒木 柳次

一流の店なりウオーター気兼ね 三重縣

寺田 君枝

軽はずみだったと旅の宿で悔い 大坂市

岡田 克美

ピンボケが芸術写真の選に入り 京都府

三輪 雨情

旧友へまずは妻から紹介し 静岡縣

寺村 幸夫

乗車券子どもに持たせ酔うている 東京都

脇西 漂月

レセプション八割寄付の膳につき 兵庫縣

清水 庄八

暑中御伺

川雜 大聖寺支部

石川県加賀市大聖寺
福田町十三番地

浜田 久米雄

林 葵丘

武部 香林

武部 若菜

津田 麦太楼

宗高 矢寸志

江国 幽谷

光好 陽子

外一同

川 雜 岡 山 支 部

大阪逓信病院

烏ヶ辻川柳会

(順不同)

会長 若林草右

足立 春雄

市場 没食子

生越 正徳

小野 木凡平

木村 よしを

真野 康彦

北川 春果 客員
半田 夏生 幹事
橋本 幸男 幹事
中谷 ハナ子
水谷 竹莊
乾 静夫
西 戸竹志
池 戸桃村
久保 正寛
稲 森けい女
堀 風仙洞
小 沢史葉
梶 本露見



川柳と宗教

— 豆秋さんをしのぶ —

戸田 古方

豆秋さんをしのぶ六月旬会の日、私は北摂箕面の丸善石油学院へ出向きました。宗教教育研究会がそこであったのです。そこで驚くべき立派な生徒を見て来ました。

全国からよりぬいた秀才に、事業の幹部養成をしているのです。当事者の説明では、卒業生の進路は束縛しない社会福祉事業だとのことでしたが、給費、全寮制で、至れりつくせりの設備の下に総合的人格教育が行われているのです。

社長の発意で建設された宇宙の宮という超宗教の殿堂が隣にありまして、そこを通して宗教教育のタガネも一本はまっています。生徒たちはきびきびしています。産業報国に火の玉と燃えているようでした。

文字通りの前向き教育です。しかし、まだ数回の卒業生より出していません、卒業生が命終の日まで、この状態が続けば大したものだと一寸気にもなりました。

世間知らずの箱入りで抵抗力がどうなるかと、指導者たちも、そ

の心配を正直に告白していました。が、私もじっと考えさせられました。

生徒達の中には孤児も、片親のもいるということでした。不幸な幼年期をここに抱き上げられると、その日から順風です。心身の厳しい鍛錬によってたき上げられはしても、ゆるがぬ順風にのるという危険を自覚しているかどうか。

とかくこの世は住みにくい。仏教ではこの世のことをシャバと申します。思うようにならないところという意味です。

仏に近づくチャンスは苦の自覚からはじまると申します。苦のものと迷いであり、迷いのものは欲望です。そして欲望をどうしつするかということが幸、不幸の岐れ道なのであります。

一心不乱に作句に精進している人のすがたはこれそのままに求道のすがたともいえるでしょう。

作句の動機もまた不如意によって動きはじめます。はらふくるる不平、不満を句にぶちまけた時スーッと心よくなってくるのであり

ます。

豆秋さんは句によって、誰からも犯されない自由で自分のものにされたにちがひありません。

欲を断ち、欲にブレーキをかける、これはむづかしいことのうちでもむづかしいことです。親鸞によつて数えられた仏のみちは欲のそのままでスーッと幸になれる、不断煩悩得涅槃と申しますが、煩惱具足、とろうと思つてもとり切れない欲であることをみぬかれて、そのままで仏の腕に飛びこんでゆく、これが親鸞によつて教えられた仏の道であります。その自覚が得られますと、報恩の心はみずから湧き出て来て、じっとしてはおられないのであります。その報恩とか感謝の心からされるものもののがらが、仏教という奉仕なのであります。奉仕は求道の条件ではありません。これを条件とするのは親鸞の教ではないのであります。

条件とするときには「しなければならぬ」ものであり、「せずにはいられぬ」境地とはちがったものであります。

「しなければならぬ」は幸福になりたいた人にとっては強制であります。が、「せずにはいられぬ」は全く自由意志によつてきめられることであります。

自覚しようが、自覚しまいが、みんなまもられているのが事実なら、わざわざ、よろこんでみたり、感謝してみたりする必要がどこにあるかというのは理屈であります。頼みもせぬのに勝手に生んで、と親にことを投げかけるのに似ています。

しかし、この自覚によつてはじめて、真実を見る眼が開け、あたえられたのであり、その真実を見る眼によつて、今まで、そうだとばかり思つていた苦の原因が他にあったのではなく、自分の中に見だされてくると、即ち、ものの見方が転換されてくると、心はずややかさで満されてくるのです。そして、このすずやかさが成長してくれば心はまことよろこびにみだされて、そうなるのが自然と思われてくるのです。

奉仕は自由ですが、この絶対的自由からする奉仕の精神こそは川柳を通して、誰にも抑圧されない自由をかちとるのと全くにているのです。

豆秋さんはこうした絶対的自由を身につけられた一人と確信するのであります。

豆秋さんの句には教訓めいたものがひとつも見つかりません、ことほど豆秋さんには自分を掘り下げ、自分をみつめつけていられたのでした。

路郎先生は川柳とは「人間陶冶の詩」といわれました。人生に溺れる危険から救われて、静かに自他ともに公平に見る眼が養われるということなのでしょう。

ナムアマダブツはわれわれに静かにものの本当の姿を思い出させ

川維米子支部

松 露 川 柳 会

米子市富士見町一三五小西方

真 鍋 一 瓢

大阪市浪速区塩草町二五六

浜 畑 胡 蝶

大阪府大正区鶴町四ノ一九九

社 誌 雑 柳 川

同 部 支 寺 浜

吉 田 圭 井 堂

堺市浜寺昭和町一丁三〇
電 報 〇 三 〇 五 四 番

土 井 文 蝶

大阪市西成区松通
九ノ二二

てくださいます。時とところをこえて、その場の主人としての自分をみつけふるまわせていたただけるのです。

ナムプミダブツとは何なのでしょう。一口に申せば「お前は真実の中に生きているのだ、真理の支配の中におかれていることを忘れてはいまいか」といつも警告して下さるのです。それを忘れさせる欲の色めがねをはずして疑いもなく本当の色や形を見せたいだけなのです。

気がついてみると、迷って、そのために苦しんでいることが馬鹿らしくもなってきました。例の弘法大師の作といわれる「いろは」歌は実にたくみにこの間のすがたをうたい上げておられます。句えるもの、華かなものも衰えるということを悟ってみれば、衰えたとして亡びんとて、そうびつくりすることはないのであります。有為の奥山



豚だんぎ

苦笑善哉

木山 遠二

百姓は誰でも出来るとは誰でもが言う。私もそう思ったので十五年前百姓になった。村役場から引揚者救済として一挺を恵んで貰い、其日から石ころ山へ出かけた。一家六名を養う為の開墾である。然しいくら開墾で汗を流しても直ぐ金になる訳ではない。それによっての収獲は何年か先のこと

である。それまでをどうして食いつなぐか……丁度その頃未曾有の養豚ブームで、仔豚一頭一万円が通り相場で取引されていた。友人Kは一頭の豚を飼って十頭の仔豚を生ませ十万円を儲けた。「ヨシ俺もこれだこれだ」と早速親族へ憐みを乞うて金一万円也の借金に成功、あちこちと奔走の結果、掌へでも載せられる程の仔豚一頭を手に入れたのである。

それは戦後食糧不足が深刻を極め、一家六名の者が寝ても覚めても腹へこに悩まされ続けて居る頃であった。其処へ豚と言う大食家が割り込んで来たのである。人間六名と豚一頭を養う為には、六名の者が引揚の際背負って帰った六頭のリュックサックの中から一枚宛の古着を出しては、K町へどれだけ運んだことか……十カ月かかってやっと二十五貫の豚に仕上げ売却して得た金が八千七百円である。つまり豚を無料で育てて、其の上に千三百円を持って行かれたと言う事だ。馬鹿げた暴落ぶりだ。暴落と言うよりも気違い相場が正常な相場に戻ったと言うのが正しいだろう。それについて踊った自分と言う男のおめでたさを、ハッキリ思い知った訳だが、こうした自分でも百姓は、それから十五年も続いている。百姓は誰でも出来る証拠だろう。

だが篤農連は言う。「もう何十年も百姓をするが満足に出来た年はまだ無い、何しろおてんとさんが相手だからな」百姓には誰でもないが、百姓ぐらい難しいものはないと言うのだ。まるで川柳と同じだ。

○ つい先日豚を二頭購入した。「もう再び豚は飼うまいぞ」と十五年、心に誓ったにも拘らず、又も飼う気になったのは——やはり十五年の昔、空腹を抱えて開墾した畑の桃が、だんだんと実を多く結ぶようになり、従って屑桃も勿体ない程出るので豚に消化させようと言う訳である。

前飼った豚には一獲千金の夢があつて骨身を削る思いをしたが、今度の豚は高がゴミ捨場だから気がらくだ。だが折角考えての設備だから大切に扱ふつもりだ。ところが一頭の奴は家へ来た翌日から下痢をはじめたのである。同じ物を食うて一方が固いを出し、一方が軟いとはおかしい。それに便の固い方の奴は、大抵横に寝そべったり、伏せの恰好でノンビリしているのに、軟便の方は前肢を立ててお尻を下ろし、丁度神社の狗大みたいにキチンと座っていることが多い。どうもおかし。祿でないぞと氣にかけて居たところ、狗犬の腹の腹の中にコッパパンをくつつけたようにボコリとふくれたものがあることを発見したのである。さてはこれだな、此処に曰くがあるんだな。

家内も出て来て、「買う時にどうして気がつかかったのでしょう。ほんとうにうっかりしていいものね」何はともあれ、一度獣医に見せなくてはと電話をすると、生憎の留守。「そんならKさんに見て貰つたらどうでしょう。こんなことは早い方がよろしい」と家内が急き立てるので、更にK君に電話すると直ぐ駆けつけてくれた。豚通のK君は私どもの説明を聞いていたが、だしぬけに笑い出した。「安心したまえ、あの腹の代物はだね、男子の表徴なんだよ、人間

を越えてみれば、それは全く浅き夢にすぎなかったのです。豆秋さんは数々の名句をのこされました。そのすべてが「生命ある句」として人々に印象づけて行かれるでしょう。だがそれらの句より、臨終に近い作品から作句された、この数カ月の作品にはいっそう胸をつかれる思いがします。はつきり死ぬ日がわかりながらこんな句が私に吐けるかどうか疑わずにはいられませんでした。名家中の名川柳家豆秋さんはなくなられました。その思い出の特集第一号をやりました。私の書かずにいられたかった筆が一枚一枚、一枚とこまで書いてしまいました。そして豆秋さんの話がいつか川柳と宗教といった題にふさわしいものになってしまひました。

(三六・六・九)

南区医師会文化部

杏林川柳会

岩崎 一伸
海野 五十六
河村 瑞川
富永 路文
中島 生々庵
中島 小石
平尾 太希志
福井 野迷路
牟田 一哲
安岡 珊枝郎
山川 阿茶

・ 暑 中 御 伺 ・

とは一寸場所が違ふけどね」「そんならあの座り方はどうだい」

「人間でも行儀のよいのと悪いのがあるじゃないか」

私は十年前から耳鳴、頭鳴にとりつかれて何かとヘマをやつては、笑われることが多いが、別に氣にかけるでもなく、隠そうともせず自分でも笑っている。だが今度のこのことだけは誰にも言わぬことにしている。

「彼奴本式の阿呆だよ」と指差されるのは嬉しくないからだ。苦笑はいいが、嘲笑はいやだ。



葛の葉

富士野鞍馬

泰成は落し保名はばかされる

(コリ三)

安倍泰成は、鳥羽帝の頃
(一一〇八一—一二四) 唐渡
の妖狐の化身、玉藻の前を見
破った。安倍保名は、朱雀帝
の代、(九三二—九四六) 信
田の森で狐を助け、その化身
葛の葉と結婚して晴明を生ん
だ。という伝説や戯曲があ
る。

正保四年(一六四七) 刊の

「ホキ抄」に、

「彼の晴明が母は化来の人也。
遊女往来の者と成り往行し給ふ
を、猫島にて或人に留められ、
三年滞留有る間に今の晴明誕生
有り。既に童子三歳の暮歌を一
首連ね給て曰と、「恋しくは尋
ね来て見よ和泉なる、信太の森
のうらみ葛の葉」と詠給うて、
掻消す様に失せにけり。故に晴
明上洛の初、先づ母の詠置し歌
を如何と思ひ、和泉国へ尋ね行

た、その小袖に見覚えがある。
それは柳の前と葛の葉が姉妹だ
とわかる。その時、二人の前に
現われたのが一匹の白狐。狐師
に追われたその白狐を、保名が
憐れんで、そばの祠にかくして
助けてやった。狐はその恩に感
じて、葛の葉に化身して、保名
の妻となり、やがて男の子が生
れた。それが陰陽の博士晴明で
ある。」

というのである。それで川柳
も、大かたこれに従って作ら
れている。

尻っぽをも隠し果せて信田妻

(万宝十一)

ほんとうの齢は保名に九百の

余 (拾 九)

保名には九百余歳の大年増

(タル一)

千年も経た古狐といわれて

いるので、九百も上といっ

る。また、

助かった御礼に五六年化かし

(万明元)

通力で古今の味を保名しめ

(タル八五)

化かされて得をしたのは保名

なり (〃 三九)

とかく葛の葉うしろからさせ

勝手 (〃 八五)

毛深いとしよっちゃう保名は

思つて居 (〃 一二九)

毛深いとはかり思つて保名は

仕 (末 三)

と、狐の化身との結婚生活も

詠んでいる。

それから五六年経って、信
田の庄司が、いよいよ本もの
の葛の葉を、保名のところへ
嫁がせようということにな
り、これを未前に知った狐の
葛の葉は、今はもうこれまで
と、

恋しくば尋ねきてみよ

和泉なる

信田の森のうらみ

葛の葉

と、一首の歌を障子に書き残

して、姿をかくしてしまうの

である。その時、五歳の子を

残して去るのであった。

本妻へわたす信田の置きみや

げ (拾 九)

袴着をすてて信田へ帰るなり

(万安四)

と詠まれている。

芝居で見ると、葛の葉が障

子に書き残す歌は、狐だから

口にくわえて書くのである。

爪立って女房障子へ一首書き

(万安四)

葛の葉は破れたとこを除けて

書き (拾 九)

五字書いて葛の葉が見る子の

寝顔 (タル一六二)

名高い書置嵯峨やうと信田流

(〃 一二)

祇王は嵯峨様葛の葉は信田流

(〃 一五)

書置の歌は嵯峨様信田流

(〃 九四、一五一)

葛の葉はもうコンコンと書き

残し (〃 一二)

と川柳にも詠まれている。嵯
峨様、信田流は書道の流派
で、それで、嵯峨へかくれた
祇王と、信田へかくれた葛の
葉とを利かせてある。

御覧じろ手も相当と保名泣き

(万安五)

御ろうじろ手も相応と保名言

(拾 九)

い ころうじろ手も相応と保名は

め (タル四二)

さて味も変らぬものと保名い

い (末 初)

などと保名がいったかどうか

か、川柳はおもしろく想像し

ている。そしてまた、

晴明の尻を保名はさぐって見

(万宝十三)

残された子の尻に、尾がある

かとさぐってみたかも知れな

い。狐の葛の葉は、結局、

横着な人間と寝て子を産まし

(万明三)

ということである。

伝説もまたおもしろい。

本

福壽司

心斎橋筋大丸前

電話 三三四四番

すし造る妻へ手伝う海苔を
焼き 竹 莊
宵越しの巻すし海苔が指に
着き 没食子
巻すしに明日の天気を予は
すし 愛 論
海苔の艶飯の加減もこの
すし 案山子
好きだったすしを供える仏
の日 青丹子

バツテラ

さばすしのことをバツテラとい
うが、京都では、棒すし、大阪で
松前すしともいう。なぜバツテラ
というかという、明治二十六年
（一八九三）のころ、コノシロの
大漁に目をつけた、あるすし屋
が、片身を二枚に開きふきん締め
にして、ちょうど舟のバツテラ
（これはポルトガル語でボートの
意）のようにして売り出したとこ
ろ、客は誰となく「バツテラ」二
隻おくれんか、三隻おくれんかと
いつて買いに来るようになったと
いう。しかし現在はコノシロが、
サバに変わり、温度保存のための昆
布がまいてあり、形も細長い箱に
入れて売るように変ったが、名前
だけは今でも、バツテラといっ
て、大阪市民に親しまれているの
が面白い。

バツテラが大好きだったお
母さん 勇 剣

むしずし

漫談の、凡児さんが子供のこ

ろ、すし屋さんの前に積み上げた
セイロが豪勢に見えて、高いもん
やろな、早う大きなつて、あんな
のたべてみたいとおもったもんで
すわと、思い出を語っているが、
このむしずしを好んで食べたの
は、船場のお店の、それも奥と呼
ばれた、おいえさんや、ごりよん
さんだった。古めいたつくりの商
家と商家の間にはさまれて、これ
も黒ぬりのカベ、背のみじかな、
ノレンをぶら下げたすし店がいま
も残っている。店の間がいやに小
さくて、調理場がいやに大きい、
だいたい大阪のすしは、おみやげ
と出前がほんとう、店でたべて貰
うより出前本位のすし店が多い、
むしずしは船場の奥にむすびつい
て育ったともいえる。ちらしによ
く似ているが、むしてあるので、
なま物をたべることはなく、暖か
いの冬に喜ばれる。

ささめ雪出前船場の風にそ
み 梅 里

叱らん先に出前のすんまへ
んすんまへん 栗

いなりずし

油揚げに飯を詰めたもの。

茶布すし

茶布用の玉子にくるみ、茹で三
ツ葉で結ぶ。

ちらしずし

好みの材料を混ぜて、もみ海
苔、錦糸玉子をつける。

子に盛ったすしはかやくの
多いとこ 草 々

現代柳人録

五月

(79) 小西 無 鬼

(一) 小西三郎(二) 無鬼(三)

なし(四) 兵庫県多紀郡篠山町小
川町一番地(五) 明治37年3月21

日(六) 兵庫県氷上郡(現春日
町)大路村松森(七) 現、無職、

但し家業はタバコ小売(八) 篠山
一七〇(九) 神様を鈴でおこして

頼んどき(一〇) クラシックな音
楽を聴く事、子供達と楽しく談笑

する事(一一) 良妻有(一二) 大
正十一年頃の春

(80) 宮 島 天 真

(一) 海原敬三(二) 天真(三)

重石楼丘州(四) 大阪市内南区坂町
二四(五) 明治30年9月5日(六)

広島市(七) 金物荒物商(八) 五
五七〇九(九) 四ツ橋のさて橋の

名はなんと(一〇) 演劇など
(一一) 有(一二) 昭和二十年頃

(81) 丸 尾 潮 花

(一) 竹内茂(二) 潮花(三)

丸尾(四) 大阪府高槻市富田町七
六七・日本住宅公団36号第三〇四

号(五) 明治41年3月28日(六)
明石市魚住町西岡(七) 内燃機検

査(八) (九) 困われたマッ
チだ風よさからうな(一〇) 日本

舞踊(一一) 有(一二) 昭和十一
年五月

(一) 昭和四年八月 (二) 昭和二十一年

(一) 昭和四年八月 (二) 昭和二十一年

(一) 昭和四年八月 (二) 昭和二十一年

(一) 昭和四年八月 (二) 昭和二十一年

(一) 昭和四年八月 (二) 昭和二十一年

(一) 昭和四年八月 (二) 昭和二十一年

(一) 昭和四年八月 (二) 昭和二十一年

(一) 昭和四年八月 (二) 昭和二十一年

(一) 昭和四年八月 (二) 昭和二十一年

(一) 昭和四年八月 (二) 昭和二十一年

川柳雑誌社ハワイ支部

ウイロー社

同人一同

笠岡市山口

木 山 遠 二

林 昌 男

大阪府泉北郡忠岡町
二九北住宅三八号

小 西 無 鬼

兵庫縣多紀郡篠山町
小川町一

岸 南 柳

男まえ製造所

昭和三十六年盛夏

石 居 高 志

東京都杉並区西高
井戸一ノ八三



特別賞受賞の路郎主幹（写真家多志氏撮影）

一年一度の夢の柳宴！
愉快指数の天国！

川柳まつり（第八回）

1961年度の路郎賞に挑む

優勝楯の栄冠、酒井ひか平氏に輝やく

— 会場 —

大成閣楼上

太陽がいっぱいという七月十六日。この暑さは特にきびしく、会場である大成閣へ着くまでに汗びっしょりだ。会場へ入るとここは涼線地帯で夏を忘れる別天地である。

明治二十一年（一八八八年）七月十日が先生の誕生日で、かぞえてことしで七十三回目を迎えられるわけである。このよき日を祝う川柳まつりも第八回を重ね、いよいよ柳界の最大行事として貫祿も備わってきたようである。

麻生路郎賞受賞作家は第一回の「食数支部榎原一善」第二回は「大鉄局支部正木本客」次いで「篠山の小西無鬼」、「川維本社西いわを」、「333川柳会の田中狂二」の諸氏——本誌第三八七号に句を発表。

第六回（34年7月12日）会場大成閣

「親譲り」

親の血が無事な男にしておかず

にしなり支部 西川 晃

第七回（35年5月15日）会場宝塚阪急旅

行会館

「学生」

まだ休みかと学生じゃまにされ

浜寺支部 井阪東天紅

この井阪東天紅氏から大優賞楯が返還され、いよいよ第八回川柳コンクールに挑むラッパが柳界に鳴りひびくのだ。時に一時三十分、松江梅里氏の司会によってこの大絵巻が展かれたのである。

若本多久志氏は、川柳まつり準備会の日、先生から全国へ川柳の旅する壮図を聞かれ、若いこちらが驚いたと、先生の長寿を祝って開会の言葉とされた。

挨拶の中島生々庵氏は、帰日以来休養する間もないご多忙さである。

昨年は信州、本年は松山へと、このように元氣になられたことはまったく奇跡的だと、医博としての立場からも恩師のご健康を祝い、毎年、川柳まつりには同じようなことよりしゃべれないと結ばれたが、願くば毎年同じようなことをこれから先き何年

も何年もつづけていきたいものである。

さいごに路郎主幹登壇。昨年よりもウツと元氣に、先生みずから言われるように五才は若く見えるはつらつさである。

全国一都五六一市を余命のあるまま、その風俗、人情、そしてその土地の著名人に一人でも多く会っておきたいと、熱弁火をはくところ青年路郎の面目躍如たるものがあつた。

古い人たちが年々消えていくので、のこった自分がだんだん責任が重くなって、よほど元氣を出さねばならぬとハリキッておられるあたり、正に青年である。

松山旅行のはなしは18ページの「道草」を読んでいたとだけ、柳暦だけではいたずらにカビがはえるだけだから、常に新しい若さをもち、一つの目標を作って、それに魂をうち込んでいけと叱咤された。

遠来の柳友として、山田静木氏（広島県）山田季實氏（広島県）北山越山氏（兵庫県）酒井ひか平（同上）永尾水断

氏（同上）小西無鬼氏（同上）植村客遊子氏（姫路市）内海敬太氏（奈良市）菱田満秋氏（和歌山県）大久保和三郎氏（京都市）らを紹介すれば会場は拍手をもってこれを迎えるのである。ようこそご出席くださいました。

会場正面にはげんぜんと大優勝楯がきょう晴れのミスター・川維を待っているかのようである。

まず、この大柳宴の中心である披露は、席題「へそ」の清水白柳氏から始まる。一喜一憂の思つまるなかに席題から兼題へと進み、兼題のトリをうけたまわる中島生々庵氏選「長寿」の天位、正木本客氏が本年二回目の不朽洞賞杯を獲得され、永久保持へ歩一歩力強くふみ出された。

さて、待望一年、この日のために鋭意柳魂を練磨して、栄えの路郎賞に挑む発表が恩師から披露される一瞬である。入選者が各吟社の人やわが川維支部と、いろいろとりどりのところに路郎賞の意義があ

り、その一句一句に会場の全神経が凝結するのである。

「これから三席」と重々しく言われ、気軽うに引受けてやりや念を押し

作者は第三回の受賞者篠山支部の御大小西無鬼氏であった。つづいて二席は、

お気軽にしてねとそのままほっとく気

杉前南宗氏の作品である。第五回の田中狂二氏や、第七回の井坂東天紅氏らを生んだ川村好郎氏に薫陶をうける南宗氏が、堂々二席へ食いこみ333川柳会のために万

丈の気を吐いたというものである。

ここで会場はシーンと水を打った静けさになる。泣いても、笑ってもこの一句である。果してミスター・川柳は、他社の人か、わが支部の人か。

「第一席」と、思いなしに主幹の声もピンと張る。

OKと気軽 終いを聞いていす

本年の優勝権は、再度川柳篠山支部がその結束の実力を示し、酒井ひか平氏堂々ミスター・川柳となる。ここで期せずして越

る万雷の拍手こそは「いのちある句」への行進譜となつて来年の川柳まつりへとつづ

くのである。(不二田三夫)

★★★

第二会場

懇親宴

興奮の連続だったさしもの大柳宴も今は足をくずしての懇親宴となる。ここかしこに大テーブルを囲んで酒、ビールが飛ぶ。

風味は名代の中華料理だ。

路郎、腹乃両先生が各テーブルへ和やかな笑顔で一都五百六十一市訪問よろしく回

わられた。生々庵副主幹が外遊みやげのタバコを各テーブルへたくさん配られ、そうこうするうちに芸達者の面々、今やおそしと出番を待つ。

司会松江海里氏、機を見て開幕を告げると、例年のように後藤梅志氏の謡がまず明々と会場を庄す。予め吹き込まれていたデ

ィブレードで「松風」が紹介される。さすがに本格的な名調は定評のもの。

加藤繁雄氏の古典奇術は写真のような三本の綱と一つの小箱をあしらつての支那ム

ード横溢の名品である。

遠来竹原市の山内静水氏は、腹乃女史作「飲んで欲し止めても欲しい酒を酌ぎ」の川柳朗誦で拍手を浴びる。

現職警官である中村瑞歩氏は豊かな声調で「黒田節」を唄う。見事なものである。

篠山三人男はそろつての芸達者で、本年度路郎賞獲得のひか平氏の「拳闘」は正に

チャンピオン級である。水断氏のデカンショ節は「猿踊り」で、越山氏はバレエの「白鳥の湖」である。まこと腹の皮のよじ

れる名演技ぞろいである。

★

腹乃女史の「六段くずし」、潮花氏のき

ようは「吉三節分」と、舞踊は定評のあるところ。

★

わが川柳の宴会特別公員である、新日本放送の岩崎愛二氏が「この道はいつか来た道」を独唱。こうした名士の隠し芸も川柳まつりならではのものではあらう。西いわを氏は「浜辺の唄」

で童心をよみがえさせれば、傍島静馬氏もリバイバルソング「ジンジログ」でありし日の青春時代を披露する。

★

ここで女流三名花の登場となる。内藤さき子さんが男すがた

で浴衣に角帯というイナセな雷蔵ばりで「船方さん」を踊れば大向うからはヤンヤの声援が飛

ぶところ懇親宴もクライマックスだ。藤村女さんは美声で民謡「会津磐梯山」を唄う。サテ

ここで川柳婦人友の会の演芸部長である岡田花奈さんの演しものは詩吟舞扇である。写真を

ご覧じませ。日本刀ひっ提げてのM過剰のすさまじさである。

★

春葉氏の「オハラ節」は名替

え歌の奇技さだ。いよいよ大詰めとなり陳楽・李文蝶両大人コ

ンビの中国奇術は実に意気の合

ったもので大爆笑の渦が巻くな

かに、生々庵氏の音頭で主幹と

社の隆盛を祝福して万才三唱閉

(橘高薫風子)



潮花氏の小唄舞「吉三節分」



・繁雄氏の古典奇術・



腹乃女史の「六段くずし」



花奈女さんの剣舞「川中島」

麻生路郎賞受賞句決定(1961年度)

特別 課題 氣 輕 入選 発表

(一 席)

OKと氣輕る 終いを聞いていず

川維篠山支部 酒井ひか平

(二 席)

お氣輕にしてねとそのまほ
つとく氣

3333川柳会

杉前南宗

(三 席)

氣輕うに引受けてやりや念を
押し

川維篠山支部

小西無鬼

(佳 作) 三句

Mボタンはずして氣輕な駐在さん

川維奈良支部

内海敬太

梅田まで行く氣輕さで東京へ

川維本社

加川大然

氣輕さが氣に入り養子に來いと言う

川維奈良支部

植村客遊子

氣の輕いひとやと台所で喰わせ

川維本社

丸尾潮花

若せんせの氣輕さがようはやり

川維篠山支部

河原みのる

ボーナスが懷にある氣の輕さ

川維福岡支部

永松東岸

帳付けで氣輕るに飲める世に戻り

川維広島支部

山田季賛

お氣輕るなにお方じたと記事になり

杏林川柳会

山川阿茶

川維土佐支部 三栖紀人
ステテコでゆるる隣に風呂が沸き

川維土佐支部 川田喜怒

あまりにも氣輕で頼る氣もうすれ

川維土佐支部 大洲大八洲

交番へ氣輕るに入る出前持

川維土佐支部 金沢醉雀

立っているさかい氣輕に使われる

川維土佐支部 吉田圭井堂

夫婦でも氣輕るく言えぬ事が出来

川維福岡支部 木村水洞

焼増しを氣輕るに頼む人である

川維大分支部 正木本客

氣輕るさへ付け込んでいるエースト

川維大分支部 谷 一平

氣輕るさはつい内幕をぶちまける

川維本社 下山清潮

お氣輕るに会釈降下もうれしう

川維福岡支部 河相すむ

私は五十才「独身です」と言える氣輕さ

川維福岡支部 小西三知

長とつけば世界一周氣輕そう

川維奈良支部 大東草風

下心氣輕になればのまあ飲めの

川維阿波支部 松江梅里

氣輕にはものたのまれぬ今の友

川維奈良支部 富田大吉

試験済み氣輕るく肩をたたくなり

川維奈良支部 今西泰彦

人の氣も知らず氣輕るう借りて去に

川維出雲支部 久家代仕男

お国入りした氣輕さに失言し

川維土佐支部 城 正一

やせぎすの男氣輕るにもう動き

竹原川柳会 杉原愛鳩
氣輕さがまた総会で役もらい

川維土佐支部 吉田隆史

氣輕さに釣られ言質を又とられ

川維土佐支部 西田柳宏子

さからう事知らず氣輕に生きている

川維土佐支部 高津徹也

旅に出た氣輕るさ妻と風呂に入り

川維土佐支部 牛島水京

新聞を見てて氣輕るに席を開け

川維土佐支部 後藤梅志

先行つてますと氣輕るう死にはつた

川維土佐支部 西川 晃

氣の輕い人やと思う録音機

川維土佐支部 石川一柳子

チャンスだと見てか氣輕に貸してくれ

川維土佐支部 池田泉水

お見合の席で氣輕が馬鹿にみえ

川維土佐支部 野々口美舟

墓参した故郷も氣輕るにしてくれ

川維土佐支部 梅田久雄

氣輕さが買われ世話役持てて居り

川維土佐支部 築山快夢起

宿の下駄氣輕るに向いた派伝い

川維土佐支部 宮口笛生

後任がきまり氣輕さ惜しまれる

川維土佐支部 城 正一

それぞれに氣輕るになつて産科を出

川維土佐支部 樋口謙三

遺言を氣輕く引受けもてあまし

川維土佐支部 平野光道

氣輕さをおつちよこしといひと評価され

川維土佐支部 三井静夢

月一でええかと氣輕に借りて行き

暑 中 御 伺

高 峰 柳 児

長野県須坂市太子町

高 山 清 勝

石川県能美郡辰川温泉

木 村 千 容

岡山県倉敷市新川町

千老番地

辻 白 溪 子

丸 川 初 甫

松 川 杜 的

植 村 客 遊 子

保 西 岳 詩

阿 万 紅 月 的

吉 永 紅 月 的

永 尾 永 断 生

宮 口 笛 太 生

塚 脇 笑 太 生

大 江 秋 太 生

都 倉 求 女 客

正 本 水 客

大 鉄・天 鉄 局 支 部

福 田 丁 路

高槻市大字水室

六九二の四

田 村 緑 朗

岡山県英田郡美作町湯郷五二

竹原川柳会

会 長

松 井 可 笑

川柳本社 真鍋一瓢
ためらって言えば気軽に受けてくれ

川柳下関支部 中村九呂平
責任のない席気軽な口をきき

川柳本社 長野井蛙
河豚料理気軽に引受けたらど

川柳本社 里田一十
約束の帯を気軽にう忘れられ

川柳本社 山田蛙水
病人に気軽いうて叱られる

川柳本社 西尾 栗
こんどのは気軽い署長で歌も詠み

川柳阿倍野支部 伊達堰子
仲人を恩師気軽にしたるがな

川柳本社 市場没食子
仏とも言われ気軽な民生委

休通川柳会 杉本一鶴
気軽うにへチャの女中が腰を上げ

川柳岡山支部 江国幽谷
気軽うに引受けババはよう忘れ

川柳出雲支部 中川晃男
よくばやく女気軽な夫持っ

川柳西宮支部 伊藤入仙
ご同伴気軽な旅へ伊丹苑

川柳西宮支部 若本多久志
検査官屋台であえば酌いで呉れ

川柳小松支部 関戸宗太郎
もう気軽足駄のままで出かけた

川柳豊中支部 黒川紫香

選後に

麻生路郎

川柳まつりも既に八回になつた。今回は特別課題は従来と少し

くおもむきを変え「気軽」とした。応募句は例によって随分広い

範囲から集まったが選句の結果は右の通りだった。題は気軽だが、

作品まで軽く扱う必要はない。これまでの特別課題に比較して、ヤ

ヤ見劣りがするようだ。

★第一席の、ひか平君は川柳篠山支部の会員で、支部きつてのベテ

ランである。最近では前支部長に代わって、支部のために尽されて

いる。

次に第一席から第三席までの短評を試みた。第一席のひか平君の

「OKと気軽 終いを聞いていず」は軽妙な穿ちとして採った。

気軽な人だけに、少し慌て者らしい心理を、巧くキャッチしてい

る。第二席の南宗君の「お気軽にしてねとそのまはとく気」も

矢張り軽い穿ち味をねらって成功している。近ごろの若い女性の割

り切った気持ちに充分しみこなし

たところがよい。第三席の小西無鬼君の「気軽うにひきうけてやり

や念を押し」も亦穿ち味百パーセントである。引きうけてはもらっ

たが、何だか頼りないというところから念を押ししたのである。面白

祝電感謝

木次支部殿、石井高志殿

出席者——路郎・紫香・柳宏子

・水洞・与呂志・梅里・好郎・潮

花・多久志・すゝむ・敬太・十悟

・舟遊・庸佑・堰子・狂二・雄声

・三司・東天紅・真砂・柳志・水

客・恒明・薫風子・栗・句念坊・

静水・季賛・旅風・一三夫・メ女

・文蝶・計光・昭司・蛙水・阿茶

・越山・瑞歩・夢虹・ひか平・静馬

・高史・客遊子・白柳・愛二・鮎

子・摩太郎・永断・喜久堂・圭井

堂・生薑・梅志・尚史・水京・い

暑中御伺

二 愛 崎 岩

京都府乙訓郡長岡町梅ヶ丘二丁目三十番地（阪急京都線長岡天神駅下車）

〔新居〕

★ 大優勝楯二度ひ

篠山支部へ行く

昭和三十一年の川柳まつりでは篠山支部の御大小西無鬼氏が

本店の平へ課長の如才なしの名句を発表して、大優勝楯を

篠山支部へ持つて行かれた。それから五年目のことはその副将格

である酒井ひか平氏の頭上に栄冠が輝いたのである。

ひか平氏にインタビューしたが、ただ夢のようですと言うばかりであった。

「こんな感激したことはありません」

好漢ひか平氏、もうこれ以上何も言えないと言う。落ちついたら

原稿へよろこびを綴ってくださいよとお別れしたが、切までには

ついに原稿が届かなかった。

いつか読んでひか平氏の原稿に、

「大優勝楯、再度篠山へ持つて来る」と、支部の方々と誓いあったと書いてあった。その五年間の精

進は並大抵のことではなかったこととおもう。よくぞかちとれた

と、更めて敬意と讃辞を送って二度あることは三度あるを示して

いただきました。

（F記者）

八木摩太郎
八木徳子

堺市九間町東二丁山之口筋
電話堺②七二三三五番

川柳雑誌社

にしなり支部

西川 晃

大阪市西成区玉出新町通
一の二

土井 文 蝶 志 人 蝶
吾郷 玲 柳 潮 風 連
本住 満 旅 旅 旅 旅 旅
石倉 旅 旅 旅 旅 旅
岸多 清 清 清 清 清
本沢 保 保 保 保 保
平田 葉 葉 葉 葉 葉
道永 活 活 活 活 活
福生 敏 敏 敏 敏 敏
岡原 歌 歌 歌 歌 歌
中川 竜 竜 竜 竜 竜
福井 竜 竜 竜 竜 竜
伊集院 竜 竜 竜 竜 竜
加川 竜 竜 竜 竜 竜
西川 竜 竜 竜 竜 竜
後藤 竜 竜 竜 竜 竜
西川 竜 竜 竜 竜 竜
後藤 竜 竜 竜 竜 竜

川柳まつり

川柳まつり
名句がいつばい

兼題「作家」以下三才だけ発表。
スペースの都合で以下次号。

兼題「長 寿」 中島生々庵選

長生きのつもりでなかった金遣い 満秋
長寿とは逆な世相を淋しがり 淡舟
長生きで残ったものは本のちり 愛二
死にたくも死ねぬ長寿をうらやまれ 孝風
平凡に生きていた長寿を讃えられ 雅堂
まだ生きていやはたんと長寿はめ みのる
養老院長寿の愚痴は子に死なれ 井蛙
一通りは読んだ長寿の秘訣の書 六竜子
人生に疲れて長寿無口なり 鮎子
長生きは長生きなりに欲をもち 南宗
長生きをしてやと子が酌み 光郎
東京の係を米寿は自慢にし 紡毛
二号ともまだ手をきらず喜の祝 大然
長生きのおかげと母はテレビ拭く 涼髪
あやかれと長寿がくれる生がたみ 阿茶
長寿善哉息子優しい嫁もらい 徹也
口と足だけは達者な長寿なり 東岸
長生きの思い出ダムの底にされ 湖山
足腰の米寿と見えぬ舞扇 三司
足りること知って長生きしとります 圭井堂
街頭の易者に長寿保証され 紅月
見も知らぬ人に長寿をねぎらわれ 宏子
端然と写す長寿の祖父の顔 蛙太
菊作の趣味へ長寿の賜盃くる 梅里
写真とるときは頭巾を着る長寿 静水
持ちつてぬ筆を米寿にきらされ 尚史
死ぬこともできぬ長寿を孫に詫げ 美舟
死にたうはない長生きの遠い耳 多志
六十の当主へ母のかまい過ぎ 置食子
置業だけは長寿の家も置き 一乃字
長生きの母ゆつくりと物をかみ

長生きへ通訳が要るマイク向け みのる
金婚の夫婦仲よく喧嘩する 葉光
晩酌に五勺きつちり飲む長寿 梅志
孫ひ孫中に長寿が小さく居り 旭峯
長生きの母に済まないことばかり 梅志
漢菜の匂う養老院の昼 入仙
癖のない酒で長生き親しまれ 水客

兼題「外 遊」 北川春果選

その実は腰巾着でした外遊 梅里
外遊したけれどスランプ未だつ 静馬
外遊のそれはさておく話あり 栗一
大使館泣かせ羽田を笑うて立ち 正一
外遊にエチケットから勉強し 水京
幹事から時間を延ばす帰朝談 梅志
外遊の成果ちよびり票がふえ 鮎子

川雑西宮支部

小浜牧人

交通局川柳会

北川春果 岡島孤舟
富岡淡舟 森文夫
浜畑胡蝶 藤田凡々
児島与呂志 山口雅浩
草深醉舛 橋本雅巢
米虫一の字 福島正則

パリの夜だけは満喫して帰り 小石
外遊は嫌ア天下も見て帰り 阿茶
外遊へ派手な背広をつくらせる 紅月
外遊は日本の良さを忘れかけ 惣治
ひと月の外遊マナーにくたびれる 圭井堂
荷をしに行くのか渡米派手に立ち 魁光

棄てて行く窓をパリーの屋根の下 大八州
二代目を継ぐ外遊をさせられる 晃男
息抜きの外遊ですとは羨やまし 花美
アメシオンへちと大げさな壮行会 晃
外遊の分はアルバム別に貼り きさ子
外遊から帰り日本の小さいこと 無鬼
マロニエの散った巴里を発つ便り 堀子
外遊の写真ここにも鳩がいる 薫風子
役得の順が回ってくる外遊 尚史
外遊はカタコトまじりで浮気もし きさ子
カラー写真うつしただけの外遊さ 文秋
外遊はあちらずくめで戻って来 摩太郎
外遊の土産銀貨を一つくれ 静水
学究と言う外遊はひとと発ち 翠光
恥かいたところは省いた帰朝談 柳志
外遊を同期はめたりくさしたり 潮花
護符くれて母外遊の無事祈り 光郎
外遊へ慌てて英語習い出し 孝風
外遊をしてから愛妻家にかわり 白水
マミドルの用意を外遊おしえられ 舟遊
パリの街名も知らぬまま回って来 愛二
外遊のみやげはライターボールペン 淡舟
外遊の手真似で買ったと言わず 愛鳩
外遊でうるさい女房のよさを知り 多志
外遊で日本の成長確認し 喜久堂
アメリカヘデモから逃げるように 光道
外遊から帰れば裸婦の額をかけ 峻多路
外遊のみんな日本が好きと褒め 天悟空
8ミリで写し外遊見せ歩き 兼好
外遊はカラー写真を撮っただけ 一瓢
フランスで切った頭で帰って来 阿茶
夜の部もきかせて欲しい帰朝談 すむ
外遊から帰って妻へもう持たせ 宗太郎
爪切りの音も日本に遠くなり 太客
外遊の旧婚旅行羨やまれ 葉光
マミドルの方はパリーの夜に飲み 雅堂
帰日した記者会見の国訛り 春果

川柳雑誌社

奈良支部

川雑・鳥取支部

鳥取川柳会 同

工藤 甲吉

青森市長島三ノ二
東奥日報社編集局内

橋本写真材料商
大阪市東住吉区平野
西之町八三

川柳雑誌社

奈良支部

県立奈良高等学校
短詩型文学同好会内

河相 すむ
西宮市川東町一〇九
電話西宮三局〇七六七

甲南川柳教室

はばたき川柳会
伊丹工場
新明和工業KK

米沢 曉明
愛媛県大洲市常盤町
九一番地

川柳会一同

平田 越舟
広島県安芸郡船越町
三三五

広島支部
平田 越舟
広島県安芸郡船越町
三三五

川柳まつり

兼題「大阪」 土井文蝶選
新世界殺気がはらむ灯がともり 南宗
上方の落語の味も遠くなり 薫風子
ネッチリと大阪弁が食いさがり 柳宏子
けむたそに大阪の鳶輪を画き 正一
西成と書いて宿帳見直され 圭井堂
食べた話ばかり大阪から帰らず 明朗
大阪弁夜行列車を眠らせず 大八州
大阪の重き地球が凹んで来 可住
やんわりと大阪弁にいなされる 静馬
大阪のこんな場末が動かれず 梅志
ほんぼんの嫁は標準語を使い 薫風子
酒好きでつい大阪を離れかね 小石
大阪へ行つた証拠の栗おこし 大八州
栗おこしと一しよに修学旅行帰り 魅光
物乞いに銀貨もはいる戎橋 圭井堂
大阪で黒い雀を見つたり 湖山
戎橋へ立たせ大阪の自慢する きさ子
大阪の水に馴れたと母へ書く 舟遊
心斎橋きつねうどんにとく 昼すむ
新しい波に船場の暖簾ゆれ 晃
戎橋昔眺めた位置に佇つ 徹也
ねつちりと大阪弁に値切られる 弘道
大阪でうちより不味いうどん食べ 無鬼
二キロ程肥えて大阪から帰り 夢虹
アリバイの土産大阪駅で買ひ 梅里
大阪を立ちのいてげつぷ出しつ 野迷路
自働車も片足上げる 御堂筋 摩太郎
暖簾から見る大阪の塩こんぶ 三司
大阪へ出て来た意気は消えたまま 恒明
井池の朝ごりがんに掃いて 武助
大阪の空を気遣う旅便り 水客
御堂筋公孫樹並木が低うなり 柳志
大阪に住み倍増の外にいる 一十
無理をして出た大阪で連が向き 春巢
こいさんは算盤はずした願をかけ 春巢

年期明け大阪弁が板につき 兼孝
本店は大阪ですと小商人 光道
食いつめてから大阪の人になり 十悟
井池で急所習てる学校出 八九寸
交番できけと大阪あごでさし 井蛙
陰悪な空気を大阪弁で逃げ どんたく

暑中御伺

庵石 生々 島中
中島小石

谷地 鰻番 区〇 南二 市町 阪之 大仲

アベックが横目ですぎる法善寺 落児
大阪をおつちよこちよの産地にし 一瓢
大阪が一番ええと舞いもどり 堰子
頼堀の雨はネオンの色で降り 潮花
大阪の味で食わせる法善寺 潮花
転校の子が大阪をふりまわし 阿茶
盲腸のように言われて釜ヶ崎 一三夫
あきまへん言うてて車買うてはる 晴暉
大阪は押したらあかんがなと押し ひか平
大阪へ来てから用心深くなり 失名
大阪は暮しの裏をのぞかせず 南宗
大阪の場末に住んで口が肥え 翠光
大阪に着けば忙しい足になり 雄声
北浜を金の成る木のように言い 雅堂
殺し屋のバックになった南の灯 文蝶

兼題「作家」 西尾 栗選

勲章がとどき作家が惜しまれる 舟遊
ダービーがすむまで原稿手につかず 静馬
書き溜めをして入院する作家 葉光
ユーモア作家会えはむすかし眉間皺 葉光
推理作家角帯で来てパーの隅 葉光

兼題「聖書」 川村好郎選

パイブルが好きで冷めた女にされ 柳志
商売の嘘とは別に聖書読み 晃
神父今日自分のために聖書読み 阿茶
我執みなやぶれ聖書のありがたし 好郎

兼題「天引」 吉田圭井堂選

天引きの登山貯金が仇となり 阿茶
天引きをしたと飯場が尻まくり 梅里
払い癖の悪い奴から天引きし 南宗
天引きで来た一泊の味気なさ 圭井堂

席題「鶴」 小西無鬼選

一声鳴いて鶴存在を知らしむる 満秋
染焼きの鶴が大根足になり 阿茶
鶴の足ハイヒールから羨やまれ 水洞
寂然として鶴世を悟り居る 無鬼

席題「口止め」 酒井ひか平選

正義の味方ですと口止め断られ 恒明
なに言てんねんと口止め取り消され 舟遊
口止めの運ちゃんさんさヒスル 圭井堂
口止めにチユツと煩つた吸って置き ひか平

席題「へそ」 清水白柳選

白いシャツかなり捨てて臍を出す 旅風
ユーモアをへそにあつて生んで呉れ 生薑
へそなでるゆとり土方がころ寝する 真砂
ジャワー浴びたのに残った臍の砂 白柳

(庸佑清記)

山田 季 賛
山田 ス ミ 子
広島県安佐郡可部町
大手寺公営住宅四号

明和病院

川柳雜誌社支部
明和川柳研究会
指導 西尾 栗

支部長 西尾青一路
篠高薫風子 河相すむ
野呂鶴汀 樋口舟遊
酒井丹語 塚田東雲
本城弦月 吉本清風
小浜牧人 菱田満秋
山木留三 室田三舟
松島光一 川村山友
樋口寿榮 村上球絵
樋田文女 安上夕鈴
池田文女 村上夕鈴
末沢花美 鳥本夕鈴
山岡半歩 林夢虹
中橋川太郎 内海敬太
仲吉照児

支部事務所

西宮市上鳴尾町
電話 三〇〇
明和病院内
電話 四一七六七
研究会事務所 西宮市川東町
電話 一〇九
河相すむ方
電話 三〇七六七

西尾 栗

営業所

大阪市南区西蔵町三番
電話 五九六三番

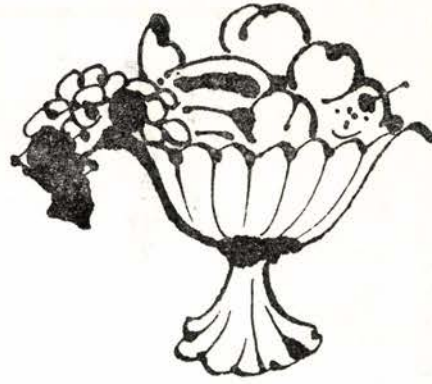
工場

八尾市八尾木六三番
電話 二二七三番

自宅

八尾市八尾木八八番
電話 二五六八番

一路集



腕白

戸田古方選

原稿の上に腕白オトトの絵 互郎
腕白の順に前から並ばされ むしな
腕白は蛙ころして墓を建て 雄声
腕白の末頼もしい眼の動き 好女
腕白へ父の失業言いきかせ ひろし
近所から腕白風邪を貰うて来 旭峯
腕白を探しあぐねて灯がともり 蛙水
腕白の後始末するセロテープ 生薑
腕白まりだうと別れた子をうひ 涼髪
二列縦隊腕白をうな顔もいる 初甫
思春期へ腕白食い気ざかりなり 雄々

腕白が残りましたと嬉しそう 秀峰
はめてやりたい日も腕白逃げて 宗太郎
腕白を追えば塀から屋根へ逃げ 勝子
腕白を萎れさせてる女の子 八九寸
腕白な子一人ポツチで遊んでる 定月
腕白がまた零点をもらって来 庸佑
すりむいたところを腕白なめただけ 夷男
腕白のことだけ恩師おぼえとり 豊年
腕白で角力野球がからつきし 九呂平
腕白を叱って負けるなどねがい 光道
がき大将なれどママには素直な子 一鶴
腕白の上にボスあり長屋の子 淀月
腕白を笑ってパパは叱らない 卯之助
憎むのでない腕白の度を叱り 光郎
ぬかるみを選んで腕白だだをこね 山椒坊
長男の腕白家の中ですみ 峰水
腕白の力をほめる肩たたき 葵丘
腕白もスカッとして男らし ひか平
腕白をなじりつピストル買つて 拳児

住み込み 杉谷湖山選
住込みが故郷へ帰るニユーモード 鮎子
求人欄残りは住込みばかりにて 圭井堂
幼な子を祖母にあずけて住込む気 千甫
ちゃんばだから住込み女中で満足し 同
住込みが来てから親方らしいなり たけお
住込みがふるさとの唄口ずさみ 光一
住込みはサボル呼吸をすぐ覚え たけお
住込みの魚小さく膳に乗り 忠三
住込みのいる頃風呂がぬるくなり 卯之助
住込みと小さく書いた就職欄 光福
住込みの女中が起きぬ電気釜 尚史
住込みの夢が大きい預金帳 万古
住込みの口からもれた秘密 寒男
看板の裏見て住込寝る二階 仲太郎
住込みがよいと両親だけの案 暁明
住込みになれて便りが遠くなり 弘道
住込みに馴れて便りも遠ざかり 代仕男
家風というものに住込み馴れて 祥月
住込みの先輩金を借りて 蛙水
住込みのレジャーはサンジャウですみ 惠二朗
手をつける簪住込みがまた変り 生薑
労基法住込み何処かでできてる 同
先妻の子が住込みの職をきめ 宗太郎
住込みへ水が冷たい拭掃除 勝子

住込みへいやなおすが今日もつき 草々
住込みの食事が足らぬパンを買い 淀月
住込みの女中何やら嬉しそう 秀峯
住込みの少し寝たい朝を起き ひろし
住込みの自由夢だけ遠慮せず 好女
口一つ減らせば足ると住込ませ 光郎
今度来た住込み骨がありそうな 雄水
住込みという名目にして困い 井蛙
住込みと言う条件の職があり 孝風
住込みが巻添喰った家庭揉め 古心
住込みへ男市場で待っており 瑞歩
住込みが寝巻でのぞく救急車 淀月
電灯を消して住込み我に生き どんたく
やりくりの主人へ住込みよく眠り 光道
何が気に入らぬか住込みと出る 一鶴
真面目さを買われ住込み婿養子 豊年
失せ物へ哀れ住込み疑われ 雄声

品質優良
先チカペン
TACHIKAWA PEN
タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画紙
立川ペン先株式会社
大阪市東区常盤町一丁目十一番地

亭主への愚痴を住込み聞かされる 雄々
住込みもきびしい家風だと気付き 同
住込みの三疊の部屋に金魚飼う 雄声
住込みの職業欄をまたのぞき 同
住込みの単独組会などと言ひ 弘村
住込みの不安旦那がやさしすぎ 藤波
腕に職ついで住込み落ちつかず 弘村
住込みに通ひ小さな借りがあひ 和二郎
住込みにまず向けられた捜査の目 唐佑

住 見ぬ振りも出来ず住込み米割る 圭井堂
住込みがたしかめて寝るガスの栓 淀月
腕白な子が居て住込み手こずる 古心
住込みへ親の無心がのしかかり 生薑
住込みがお義理悔の代理する 八九寸

人 御用聞きもう住込みの名を覚え 初甫
地 住込みの部屋でも富士子笑つて 一鶴
天 住込みの部屋でアカハタあつたり 葵丘

弁解

木村水洞選

弁解を無視しワンマン振り発揮 繁太郎
弁解をする程こじれる倦怠期 弘道
五十年たつて弁解きこちなく 計光
弁解のすつきりしないまま別れ 伸太郎
弁解のかわりに一升繰けて来る 古心

弁解をされてる方が頭さげ 春光
警察である弁解は疑われ 代仕男
弁解の嘘も二年目わかりかけ 照児
弁解はこの手で行くときめたべル どんたく
弁解もせず折れてくる日を信じ 九呂平
弁解を聞いてうなずく母が有り 勝子
弁解の度毎友の名がかわり 不酔
お役所は予算不足と軽く逃げ 山椒坊
弁解をすればするだけ不利になり 雪美
弁解へ妻の白い眼まだとけず 草々
弁解をしてる自分の滑稽さ 鮎子
弁解をする子の口は尖つてい 祥月
弁解をしても所詮は首と知り 生薑
許す気でないのに弁解ながさる 好女
初恋は弁解もせず涙ぐみ 光道
弁解に来たなと思う入りよう 庸佑
弁解はわかるが法は法として 豊年
弁解はせずにコソソリ握らせる 実男
弁解をせずとも誠意汲んでくれ 一鶴
弁解を法は冷たくつき放し 井蛙
弁解は言わざぬ婦長のつめたい目 千甫
子を叱り子の弁解も聞いてやり 季賛
憎む気になれず弁解聞いてやり 蛙水
先生の前で弁解汗をかき 定月
そんなこと気にしない猪口をさし 光郎
雷が落ちて弁解けりがつき 藤波
弁解はどるものなり費い込み 互郎
弁解のこと考えている幹事 孝風
弁解もできずバーの請求書 雄々
弁解も税吏は蚊の鳴くように聞き 同
弁解へ心の隙間のぞかれる 郊之助

弁解をすればするほど妻は拗ね 同
弁解をしつつ後からついてゆき 美由起
弁解を申しあわせてバァを出す 同
弁解をして居る方もかすり傷 和三郎
言釈へ半分母が口を添え 同
弁解は母に任せて娘泣き 弘村
ナイターに来て弁解を考える 同
二号には二号に合った弁解し 句念坊
弁解の代り折詰さつと出し 同
弁解をせぬ友達の良いにふれ 静水
相手の立場へ弁解さしひかえ 同
弁解へ取つて代つて妻が出る ひろし
弁解へ今日あらためて靴をはき 同
すさまじい音弁解は聞いて居ず ひか平
弁解は妻の若さが恐ろしい 同
もう済んだ話弁解してこじれ 宗太郎
うちあわせ来た弁解がくい違い 同
弁解と違つたバァのマッチが出 忠三
聞さなくない弁解を根掘り葉掘り聞 同
弁解の策をはしこで練りあるき 圭井堂
何もかも予算不足になすりつけ 同
弁解を無駄と知つて生さぬ仲 雄声
弁解を凝視しているサンガラス 同
弁解をする要もなき離婚沙汰 尚史
弁解の後はさつさと床につき 同
弁解の通らぬ妻へまた泊り 同
弁解の余地を許さぬ証憑品 万吉
弁解のかわり涙で書く日記 同
弁解が相手のプラン潰しに來 同
嘘だとは思ふ弁解聞いてやり 曉明
弁解へ有利な証人だけを連れ 同

色紙短冊
書画用品
大坂戎屋
丹月堂
電中セニセニ

弁解をどう切り出そう煙草の輪 同
総会には赤字の弁解だけで済み 十九平
戴妃になる弁解が詳しすぎ 同
弁解の予習を二人でして出かけ 同
佳
弁解へ妻の無気味な片笑くほ 恵二朗
弁解を空で聞いている廻り椅子 初甫
弁解の言い出せぬまま経を褒め 光郎
弁解も通らず病状進んで居 恵甫
弁解へすこしお金が足りません 圭本
弁解をしながら坐る床柱 十九平
人 弁解をすればアリバイ嘘になり 句念坊
地 弁解はすまい自分で床ものべ 静水
天 弁解へ妻は黙つて縫い続け 代仕男
軸 弁解は性にあわない生れつき

柳界展望

会館（天王寺電話局東隣）三階会場で中島生々庵副主幹の婦日歓迎句会を開催。外国での面白い体験談を聞いて鎮夏の一刻を持たれるよう柳人多数の出席をお願いする。▼南区医師会文化部杏林川柳句会（大阪市）は七月二十五日午後七時半から南区三休橋南詰中島小児科診療院楼上で開催。▼南海電鉄川柳句会（大阪市）は七月二十

日（木）午後六時半から難波親和クラブで開催。▼コクヨ川柳会（大阪市）句会は七月二十一日（金）午後五時半から黒田国光堂で開催。以上路郎主幹出席。▼川崎岡山支部六月例会は二十四日（土）日赤岡山支部で開催。▼川崎下関支部句会は六月十八日下関駅会議室で開催。▼ひろしま川柳教室句会は七月一日及十五日（土）午後六時から広島駅二階会議室で開催。▼既報第四回近県川柳大会（竹原市）は九月十日（日）午前十一時三十分から竹原町照連寺で開催。兼題、宿帳・夜長・連れ子・嘘・穴・他人、各題三句以内、投句は縦十八横、横三横の句

箋に明記、投句料五十円封入の上九月九日迄に広島県竹原局区内竹原川柳会松井可笑宛。▼第五回全国鉄川柳大会は七月八日（土）午前十時から仙台台会館で開催、出席者百五十余名の盛会であった。▼大洲水郷川柳大会は七月三十日（日）午前十時から大洲市竜護山で開催。▼松尾馬奮喜祝賀川柳大会は八月二十日午前十時から三戸町割烹「西村」で開催。▼第六回石川県下川柳大会は八月二十七日正午から羽咋市中央公民館で開催。兼題はおどろき・レジャー・税・電化・後輩・歌手、各題三句以内、投句は切手三十円を封入の上、羽咋市中央町中央公民館気付西せい花宛。

▼路郎主幹夫妻は七月一日大阪空港から午後三時二十分発の飛行機で松山市を訪問、五日午後六時二十分伊丹着、無事帰阪された。▼路郎主幹は七月十日七十三回の誕生日を迎えられ自祝された。▼中島生々庵（大阪市）河村瑞川（大阪市）両医博は一カ月余の欧州視察旅行から七月九日午後一時大阪空港着無事元気で帰阪された。▼西尾榮氏（八尾市）は六月廿七日、八尾ライオンズクラブ広報委員長に就任された。▼中島生々庵氏（大阪市）は外遊の疲れを癒やすため、七月十四日から十六日まで有馬温泉で静養された。▼北川春泉氏（大阪市）は六月二十七日から札幌で開催される内科医学学会に出席、北海道の観光と共に珍らしい食べ物種々味わった。▼福井野郎氏（大阪市）は川柳まつりへの出席を大いに楽しみにしておられたが親戚に御不幸があり欠席残念とのこと。▼市場没食子氏（大阪市）は通信薬部会と日本薬学会に出席のため十六日伊丹発東京接続の札幌行の日航機でカネ女さん同伴北海道へ行かれた。鹿の屋ホテルで呑んだ。また北海道はよく判らないが言っ

て、「北海道やっぱり秋の風が吹き」の句を寄せられた。▼内海敬太氏（奈良市）は原水爆禁止大会の平和行進を、同盟奈良地区奈良高校班を代表して奈良市の南入口で迎え、同盟中央委員会旗ハッポンをつけ、行進に参加された。先頭を行く赤旗を見て、数十頭の鹿が群をなして逃げたことも一つの発見でした。▼高山清勝氏（石川県）から、七月十三日の豪雨で金沢の犀川新橋が流失、裏山には蟬の声が聞え夏も本格的になりました。▼尼緑之助氏（出雲市）は四月から旧村地区の公民館長の職に就任、島根新聞の柳壇を担当したり、本業の方も競争激化で最近息もつけぬ忙しさです。▼水本無尽氏（大阪市）は南海電鉄社難波駅長に就任された。▼前田義風氏（石川県）から、豆秋氏は亡くなりましたが、当地出身の緑南・白柳氏のお元気がうれしい。そして長らく馴染んだ雅芳の諸氏を話して拝見するのはなつかしいものです。▼どの友もどの名も親し何友達。▼山田季貴氏（広島県）は七月八日スミ子夫人を同伴、仙台での全国鉄川柳大会に出席、川柳を楽しむ旅は何とも言えませんが、「塩釜の魚の何とも見て戻り」と宮口笛生氏（奈良県）は七月八日全国鉄川柳大会へ

▼大洲市の米原龍平氏が五月廿九日本社を訪、路郎主幹と万代公園へ遊覧された。



消息

出席のため仙台へ行かれ、熱心な川柳人多数と交歓された。快晴の仙台も暑いこととす。▼加茂正一氏（東京都）は七月初旬から上越国境の温泉場で静養されていたが、帰京するところでもない暑さでフツフツ言っています。▼堀川蘇堂氏（西宮市）は六月二十六日京都を廻って城崎温泉に清遊された。「保津川の濁流を今日哀れと見」▼奥津啓一朗氏（東京都）は胃潰瘍の手術後静養されていたが四月十九日から勤務を始めた。四、五月は早退、六月に入ると時間いっぱい勤めておられ、この夏はビールが飲めず残念である。▼高橋月南氏（神戸市）の句碑除幕式は八月二十日挙

みんなの暮らしが明るくなる
セキスイのプラスチック



積水化学
本社 大阪市北区字是野1

東京都中野区鷺宮一ノ八四
署中御伺 阿部佐保蘭



花盤半三ツ面子守を語る丸尾潮花氏

男なる悲しみ女にもなれず

潮花

男性が女性か、それは私にもわからない時があります。遠地の柳友が間違られるのも無理のないこと。舞扇は私を男にしてくれない時があるからでしょう。句も亦その通り。私自身どちらでもいいと思っています。

行と決定した。▼小浜牧人氏(西宮市)は舞子病院に入院加療中であるが、日中は降るような蟬の声につつまれた病窓からガラガラ光る海を眺めて市中の暑さを思いやっていますと。

碑

▼故・満南北の一盛り場をむかしに戻すはしひとつの句碑が竣工、七月十四日(金)午前十一時から除幕式と南北翁を偲ぶ会が南区宗右衛門町太左衛門橋北詰と戎橋北詰の日立サルーンで開催された。

▼三嶋美笑氏(松江市)は腹膜炎のため松江市赤病院内科に入院加療中、六月二十九日午前四時五十分死去。四十七才。氏は生前不朽獨特別会員であり、川雑米子文部を創設、山陰川柳界に貢献されていた。

▼丸尾潮花氏（高槻市）は高槻市富田町七六七日本住宅公団三十六号館三百四号へ転居。▼菱田満秋氏（和歌山市）は和歌山市北新町

五丁目三十二ニユーインディアン内へ転居。▼野村味平氏（加賀市）は加賀市大聖寺福田町一三へ転居。▼大石表氏（神戸氏）は神戸市垂水区舞子台町四八へ転居。

飛・燕・往・来

★中島生々庵氏（アシカ）より

一 路 郎 宗

賑やかなお見送りに感激して、
ります。九日夜羽田を立てて十
月五日（日本時間）アソカ

★河村瑞川氏（ハイデル）より

になりそうです。そろそろ日本が
近くなります。エツフェル塔に昇
ってワインをのみながら月を眺め
るとさすがに旅愁が湧きます。メ
シとサケがほしいです。何卒お元
気で。パリにて

▼小浜牧人氏（西宮市）の宅に電話が開通した。西宮局④三九四八

着。実に快適です。雨男への義理

六月十六日お変わりございません

★牟田一哲氏夫妻（ヨニユ）より
六月二十六日 生々庵

▼前号七頁上段二十行目の句の「一生酒を呑んだか」とあるは呑んだかと訂正。▼同十一頁中段四行目の小女とあるは少女、五行目の蛇が尻尾を飲むは呑むと訂正。

★中島生々庵氏（ハンブルグ）より

か。今日ウイスバーデンからバイ
デルベルヒに参りました。あこが
れの土地でライン川に沿い実によ
い景色です。明日はアムステルダ
ムへ飛びます。中島氏も至極元氣
です。こちらは少々いかれまし

先生お元気でいらっしやいますか。私共この度の渡航に際しましては重ね重ねの御催しに加えていただき恐縮いたし厚く感謝いたします。最底五十六才最高七十七才

▼同十八頁上段八行目古へ来るは
舌へ乗ると訂正。▼同十九頁中段
二行目「思うだけに」とあるは
「思うだに」と訂正。▼同二十五
頁上段六行目の「認証」は「認識」と訂
正。▼同三十九頁下段十二行目句
主名を草々に訂正。

二十時間許りの飛行機の旅は不安とか愉快とかよりもエアフランスの豪華な食べものが次から次にあるのが迷惑したのと氷河氷山との連絡に昼寝をたびたび。現地時間て十日の朝七時十五分ハンブルグ

た。名高いハイデルベルヒ城の寫
眞を御送りします。では随分御元
氣で。

ハイデルベルヒにて 河村瑞川
★中島生々庵氏(スッ)より

ロンドン三泊バリ五泊、今タス
―路郎 宛

という老人組ですから毎日失敗の連続です。三十四年前と比べて変わったことも相当あるようです。

メンルームおすが使うと笑われ
祈御健康、ニューヨーク、シエ
ラトン アトランティック ホテ
ルで

牟田一哲 セイ

社の黒板

に着きました。静かな街であるのと何としても私にはドイツ語の看板も飛行機の中のフランス語より近親感があって有名なハーゲンベ

イスに向います。見學で時間逼迫
いまわされ作句も思う様に出来ま
せん。私の最も不得意のゼニの勘
定が各地で変わりますので神経衰弱

一九六一年六月二十八日
只今からロンドンに飛びます。

不朽洞
☆常任理事会
常任理事会は句会

社の黒板

川雑大聖寺支部は加賀市大聖寺
福田町一三八転居。

に着きました。静かな街であるのと何としても私にはドイツ語の看板も飛行機の中のフランス語より近親感があって有名なハーゲンベ

イスに向います。見學で時間逼迫
いまわされ作句も思う様に出来ま
せん。私の最も不得意のゼニの勘
定が各地で変わりますので神経衰弱

一九六一年六月二十八日
只今からロンドンに飛びます。

不朽洞
☆常任理事会
常任理事会は句会

会
か
ら

部会と合同開催を
会を六月二十九日

(木)午後七時から南区三休橋南詰
中島小児科診療院楼上で開催。

- 一、川柳まつり最終打合せ
- 一、その他の件

を協議九時散会した。出席者、路
郎師・文蝶・栞・梅里・紫香・恒

明・いわを・潮花・水客・薰風子
・すゝむ・舟遊・いさむ・与呂志

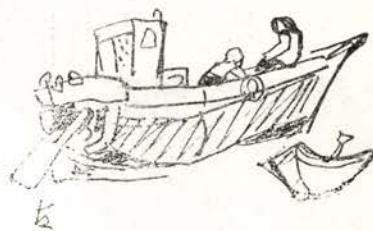
☆新会員紹介

七月
▽辻川喜仙(大阪市)正

20

100

宿のつれづれ



八木摩太郎

東京の江戸川畔、音羽の護国寺に島村抱月の墓碑がある。その墓に碑銘には、

あるがままの現実在即して

全的意義の存在を囁囁す

鑑賞の世界なり味に徹したる人世なりこの心境を芸術という、石に刻んで、後世に長く伝うる抱月の芸術観こそは、彼の一生を通して芸術に身を挺して、齢若くて死んだ抱月一生の縮図でもある。

私は生米、各所の墓碑、歌碑、句碑を尋ねて、その在りし日を偲ぶのが好きである。而してその側の、明治三十八年の歌(恋衣)よ

に刻まれた文字は、その人の在りし姿として、尚一層、親近感を抱かしめて呉れるといつも思うのである。

あの高野山上にある、東京市長であった、拓相にも就任した永田秀次郎氏の墓のほとり、青嵐の雅号に依って親しまれ、人間永田青嵐に、親しきを感じさせられる。

私は、宿のつれづれ、金剛葛城の山々を遙かに眺め、芸術の開祖、小野妹子の墓が、南河内の山田の小丘に在るのを思い出して、今の子供達が、或は小野妹子を女性視しているのだからうか。楠木正成、正行の名を知っているだろうか。齊藤実盛を、代議士などと思っているのではないだろうか等思う時がある。

この五月の中旬、塚に与謝野晶子の歌碑が、その生家に、堺市と堺市教育委員会に依って建碑された。招かれて除幕式に参列したが、歌碑のデザインは、かつて路郎先生の肖像を造った創造美術協会の白石正義氏だけに、流石晶子好みのアマリリスとユリの花を置き、うしろから見ると恰度、鳥が羽をひろげたように見ゆる近代的のもので、晶子の姓(鳳)に契んだものであるそうだが、その歌碑は、

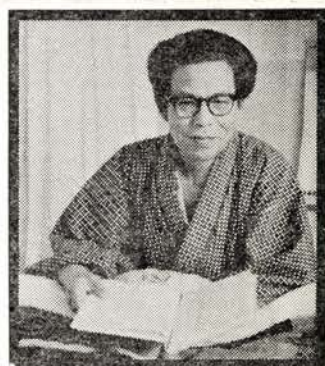
海こひし潮の遠鳴りかぞへつつ少女となりし父母の家
の、明治三十八年の歌(恋衣)よ

り抜かれて、晶子さんの和歌が刻まれていた。その時の来列者の席で、小言に「数へつつ」か「数へては」かとの話が出て、式後の座談会の席上、話題に持ち出されて話に華が咲いた。実際のところ、晶子さん自身も両首とも短冊にのせ或は歌集に上梓されたのであると話を終止符を打った。

晶子さんの二十年祭に建碑を企画せられた本年が、恰度晶子さんが名づけ親となった石川啄木の五十年祭に相当し、四月中旬郷里盛岡で盛大に行われたのは人の知る所であるが、薄倅の歌人、石川一は、

今日もまた胸に痛みあり
死ぬならば
ふるさとに行きて死なうと思う

彼が再度の上京後満四年、遂に一回も憧れのふるさとへ帰る機会がなく、都会の一隅に、じめじめと薄暗い小石川の高台の窪地、病菌の一杯になったような家で、病苦と貧苦に闘って淋しく死んで逝った。その明治三十五年に三月七日母堂を先立って、その感動のまだ静まらない翌月の十三日、遂に啄木はこの人世に「左様なら」をしてしまった。あとから、あとから、呼吸をつくひまもなく追ってくる運命に、愛妻節子さんの心も体も、痛々しい程のつかれ、恰度八カ月の腹をかかえていた頃であった。たださえ栄養が足りなくな



位士信浄道・名成

美笑さんを悼む

(文相会特別会員)

小西雄々

七月二日(日)松江市で川柳大会が開催されたので私は出席したが、松江日赤病院に入院療養中の三嶋美笑氏をお見舞するため、一列車早く米子駅を出発し、心ばかりのお見舞品を手に三階の病室の前に立った。去る四月二十五日にお見舞したときは、ドアに大きな面会謝絶の札が掲げてあったのに無いし、病室の氏名札を確認したとき、名前が他の人と書き替えてあるので、病状が快方に向い、個室から合部屋(患者が五、六人一緒に入っている部屋)に変わられたのかな? と思いつながら、通りかかった看護婦に聞けば「亡くなりました」と言う。無情な返事に言葉も出なかったが、心を落ち着けて聞いかけると、六月二十九日午前四時五十分、眠るように死亡されたと言う。病名は肝硬変症であった。

美笑氏を知ったのは昭和二十二年七月である。当時米子市に川柳会が発足し、この句会で知った。小柄で、度のきつい眼鏡と、やや長目の頭髪が印象的で、戦時中、支那で川柳をやっておられたそうで、その句に何か引き付けられるものがあつた。そして美笑氏と私が一層協力を誓い合ったのは、昭和三十年一月の川維米子支部の創立からである。雪の降る或る寒い日に、話があるから家まで来てくれとの電話連絡を受けた。炬燵にあたりながら聞けば、川維米子支部を設立することの事で、その情熱と抱負に私は心を打たれ、全面的な協力を誓った。会員も百名近く集り、順調なスタートを切ることができた。然し昭和三十三年夏から肝臓を病み、腹に水が溜り、仕事も休んで静養されていたが、何日聞いても「良くなった」と言う返事を聞くことができなかった。病気は悪化の一途をたどっていたようである。その後、米子から松江の日赤病院に入院されたが、去る四月二十五日にお見舞したときは、体

が盛になって米た五十年後の今年、地下の啄木の思ひ出や如何。古い堺の南はん貿易の町の感懐と相容れなかつた尖端的な情熱の歌人晶子も、今やっと、暖かく、迎えられて父母の下に抱かれ、ほへんんでいる事と思うと、

旅人」の
路郎先生の名句に、

を過日お見舞いした。これまでに何度か遊びにこいというハガキをもらっていたのでヤツと貴を果したような訪問だった。

阪大の井上湧三博士が前々れもなく九里丸氏を見舞いに行かれたことがあった。九里丸氏はそれがよほどうれしかったか、ほく宛の書信にそれをこまごまと書いていた。

川柳家の御多幸を祈る

宮 政 周 防

ハワイ・アイエア

昭和十年八月に発行した阪大
柳川集麻生路郎選「大川端」のこ
とも書いているくらいだから、氏
はこの句集を今なお読んでいるら
しい。路郎先生にごムリを願っ
て、「ふるくとも僕には仁義礼智
信」を揮毫していただいて氏に贈
ったことがある。氏は古い川雜
ンである。

天才へ
親類あんなものと言いの句意が偲ばれて、宿のつれづれ筆を運ばせた次第である。

雜文團地

不二田一三夫

中風で保養中の花月亭九里丸氏

の衰弱がひどく、高熱のため呼吸も困難な様子で、想像していた以上の重態であった。然し川柳に対する情熱は旺盛で、元氣になつた時のプランを披露された。面会謝絶を特に許されての面会であり、病状にさかつてはならないと、僅か十分間はどで病室を辞したが、「今度お見舞に来るときには、お元氣になっておられませうお祈りしています」と、別れの挨拶をしたとき、美奈氏の眼には涙が光

婦の客となつてしまつた美咲さん。私は悲しくてならない。
 いく度か計画ばかり組んで
 病み
 感情をまだ捨て切れずして
 伏せり
 気心を知つてゐる見舞笑うて
 米

この句は四月、私と相前後して美笑氏をお見舞した湯原一机氏が、闘病中の美笑氏の句帳から若干の句を書き抜いて帰った中のものであるが、昔の美笑氏の句と変った、淋しい闘病の苦しさがあらわれている。

台掌

また四十七才の働きざかりを、
愛妻と二人の子供さんを残し、不

なり
雄々

美 笑 句 抄

とやかくを言わずいっしょにしてやりな
病院を出れば粉な雪襟に落ち
神まいりしたと言うのも焼け出され
ビールでも飲んでてくれと二号留守
隣の娘まさか意見もしてやれず
會計が来るとマダムはお茶を立て
浮貨の金とは知らずマダム借り
奥様に済まないからと放り出され
支那服を着て出る妻はまだ若し
仲人を頼まれ足袋を買いにやり
教頭の話は釣りのことばかり
長々と臥ると皆んなに忘れられ
水泳に母は先生だけ頼り
散歩した婦り小銭で花を買い
み仏と住めば返事はせずに済み
臥床から指図してやる障子張り
人のことだから気安め言うて去に
臥いても金の工面をさせられる
貧乏をする子を母はいとしがり
宗門をかえても思うようならず

金 泥 集

麻 生 菫 乃 選

「バトカー」

バトカーのリレーで命とりとめる 阿 茶
バトカーのサイレン押売あて出し 同
バトカーは受話機を置いた途端に來 同
悪質のいたずらバトカー走らせる 同
バトカーへ夜の波が揺れかえし きさ子
バトカーが来て港尺が動き出し 同
脇切でバトカー口惜しうに鳴り 同
バトカーへ寝まきの近所揃うたり 一 栄
臨月へバトカーのことも言うておき 同
バトカーが来て弥次馬の人となり 同
夕立を切つてバトカー突つ走る みち子
医者者のデモバトカー命の綱にされ 同
バトカーに傷持つ二人の瞳が光り 同
バトカーのお蔭一命とりとめる 奈良子
産声へはつとバトカー息をつぎ 同
バトカーが来たこと喧嘩やめられず 俊 江
バトカーのサイレンけんかうと散り 同
バトカーの米かたが違いと腹を立て カネ女
バトカーも法規はずして走らせ 同
バトカーを見れば不吉な予感させ 美 喜
次回題「童話」切八月末日

ある。
「十五分ほど司会して、放送局から七千円もとればゾホらして落語の勉強もでけんやないか」
ちらつと若手をかばうとも見せたが後につづく者への不安の色が濃かつた。これも柳界に言えることではないか。

ほかが私淑している落語作家の永瀧五郎氏は言う。
「大阪の落語家に頼まれて台本を渡すと寝床の中でゆっくり読ませてもらいまつさ、と言う。しかし東京の落語家に渡すと、まず、おしいたいで、先生、ありがとうございます。では拝見しますと、楽屋であらうがどこであらうが食いつくように台本を読む。ここいらに大阪落語が東京落語に太刀うちできないトコがあるのだ」

気構えの問題である。句箋をにぎればまず句箋をおしいたたく気構えである。ほくのようにダラシなく両足を投げ出して、ガムを噛みながら味のある句を作ろうなんてシャレているからいつまで経ってもいい句が作れないのだ。

またぞろ「かなづかい」のことを書くコチラのはうも気がひけるが、やはり勉強してはしいとおもう。

新かな反対者は、「わが道を行く」と意地張っているが、では文章拝見といくと正確な旧かなづかいではなくチャンボンである。チャンボンはど見つともないものはないから、やはり勉強してもらいよりテがないであらう。

里見弴氏のものは新聞の随筆でも読まぬようにしていた。末尾の

(原文のまま)というヤツは絶対に読まぬことにしているのだから老大家のものは敬遠していたのである。

意地っぱりではなく、ほくの勉強のジャマになるからだ。理由の一つ、ほくは新かなで校正している。

ところが最近、里見弴氏は当用漢字、現代かなづかいを勉強して、(原文のまま)ということわり書きをとってしまふと言われ

七十を越すこの老大家の宣言には頭がさがった。片意地なじいさんとばかり思っていたが、さすがに文豪であると心から敬服したことである。

「ず」と「づ」の使いわけをスグ正確にやれとはムリであるが「思ひ」や「思ふ」ぐらいなら誰にで

もできることだから、あすといわずきょうスグ実行してほしいものである。

「むづかしい」か「むずかしい」か、いったいどちらが正しいのか。

これはどっちを書いてもまちがいではないが、「むづかしい派」には岸本水府氏、戸田古方氏らがある。「むずかしい派」は路郎主幹、北川春男氏らで文壇にも二派がある。

「六ヶ敷しい」と書く人もあるがコレはおやめになったほうがよろしい。

新聞は全部「むずかしい」を使っているのでもコレを使っている。モノを書くといふことはむずかしいことだ。

川 雑 婦 人 友 の 会
麻 生 菫 乃 選
山 川 阿 茶
中 島 阿 茶
武 部 良 子
太 橋 操 子
高 村 梨 花
西 田 清 栄
酒 好 陽 子
光 村 陽 子
藤 村 陽 子
内 藤 村 陽 子
小 西 村 陽 子
竹 内 村 陽 子
八 木 村 陽 子
市 場 村 陽 子
吉 川 村 陽 子
沢 本 村 陽 子
杉 本 村 陽 子
久 米 村 陽 子
藤 岡 村 陽 子
内 藤 村 陽 子
駒 井 村 陽 子
西 川 村 陽 子
中 川 村 陽 子
林 村 陽 子
西 村 陽 子
酒 井 村 陽 子
三 井 村 陽 子
岡 田 村 陽 子
川 雑 婦 人 友 の 会
大 阪 市 南 区 二 丁 井 戸 町 二 三
山 川 阿 茶

いのちある句を創れ



投稿規定

▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

川維 阿倍野支部句会 (大阪市)

金井文秋報

葬式で茶柱立つた茶をよばれ 一三夫
淡茶一杯本筋にまだふれず 葉平
スチウワーズの和風へワンダフルワンダフル 生薑
作戦は立てたが蔭の人になり 梅志
作戦を柳に風と受け流し 喜仙
作戦があつて居ねむりしてまんねん 十悟
作戦があつて小さい勝負なり 葉光
夜を徹し練った作戦当てはずれ 計光
女四十どんな作戦にも乗らず 若芽
宿直へ事務所の鍵は引き継がれ 山椒坊
うどん鉢つんで煤けた事務所なり 晃
事務所ひま趣味のガリ版刷つて 文秋
大阪のまん中に住み 税の嵩 蕨風子
臍一つまん中にある 面白さ すゝむ
まん中の一人が長い長い 祝辞 葉平
判決を聞くまん中で首をたれ 堰子

川維 淀川支部句会 (大阪市)

木村水堂選

袖の下つかって入れる幼稚園 東洋男
親バカをはつきり見せて鯉のぼり 六童子
親バカで居つてまだだ任せぬ気 句念坊
親バカだなんと互いに笑い合い 一鶴

大学へ通うてもう機嫌とリ 水洞
折角の割引券は今日限り 若菜
燐の根にもひと役もたすオプジエの美 孝夫
スイングスタ陽に燃ゆる謎の笑 花村
はお笑めば石もほはお笑もほに付 香林

川維 にしなり支部句会 (大阪市)

後藤梅志選

新聞の漫画にされる 程出世 文秋
小川の渦巻に木の葉立つたまま 白柳
まだ嘘を嘘と思えぬお人好し すゝむ
大空に手をさしのべている 獅子吼 蕨風子
汽車はもう大阪らしい空の色 柳志
灰色の空突き上げる 煙突群 晃
スポットがブリマドンナの鬱深め みち子
光線を紫紺に変えて垂れる茄子 生薑
菜ッ葉服朝の誓いへはげまされ 六童子
もう逢わぬ誓いを立てて愛しい 舟遊
誓うより確かな友の瞳が 静か 旅風
気の疲れ光線よけを掛けてみる 梅志

川維 玉造支部句会 (大阪市)

西出一米報

興奮の顔祝杯ではころばせ 守信
祝杯をあやかりまゝと戸も乾し 一栄
ポーナスがこれだけ欲しい予定表 春草
何くそと思えど指図理にかない 正一
指図もう受けぬ辞表をつきつける 文秋
中だるみ先輩達が放つとかず 由子
中だるみ末座の音が聞こえて来 白柳
中だるみ室に這入った蝶ながめ 清
お悔みもいとお給でとめてたがり 井平
いい給と言われ出鼻をくしかれる 柳宏子
いい給でまだ甘えたい母があり 清子

川維 ハワイ支部句会 (ハワイ)

築山快夢起報

停年で知る世渡りの虎の巻 弦月
朝酒をつけて停年ねざらわれ 須磨子
停年へ後妻に出来た子は五才 十三吉
処世術のみ込まぬうち六十五 細香
停年制ジワリジワリと首を締め 快夢起
停年で旧婚旅行が郷土入り 玉屋
停年のプラン故郷は近く見え 内海
停年になって慌てる不甲斐なさ 魔花麗
停年となつてわびしい日を送り エス子
停年男と共にと去りぬ 東田楼
停年へ黒星だけの過去であり 周防
停年が予定通りに来て慌て 拝山
万歳のない宴会が風邪をひき 旋風
宴会のあとには校歌で若返り 銀水
宴会へも連れて行く若夫婦 カロ女
宴会の帰りまだまだバーがある 曉舟
無礼講末席同志酌ぎまわり 柳葉
宴会ですジュースに酔うて下戸歌う 呆児
宴会に男の馬鹿をさらけ出し 青風
宴会で知った夫の隠し芸 泉水
宴会で思わぬ人の隠し芸 萩路
宴会で下戸だけ箸が忙しく 紅溪
宴会で挑む人あり飲み過し 緑星
宴会にやあやあやの顔が合い 万里歩
宴会に下戸は上戸が馬鹿に見え 紅茶
雲間風に社長も唄う 安米節 浅太
下戸もまたハイゲル持つ祝賀宴 義一

川維 備前支部句会 (岡山市)

横山一声報

鯉のぼりあげて養子のいたわれ 万女

もう一人息子が来ない 枕水 賤女
息子ばかり生れて母のしわがえ あやめ
民主主義で息子が少しわたり合い 芳月
養老院どこへ息子は行ったやら 東岸
息子より親の素行を問合せ 水仙
停年は息子にたよる顔になり 秋月
休日は息子の球を受けてやり 輝次
表札を息子に変える嬉しい日 一声
約束の日はセーラー服脱いで行き 喜白
散る花へ別れ話が持ち上り 久米雄
散る花を見て引退の心決め 伊久野
紙吹雪散つて行事が一つ済み 博
ちっぽけな駅特急が音ですぎ 竜泉
齒ぶらしの根気我が身を擦り減らし 三六

スマートで
着心地良い

GOLDEN
O.S.K.の
紳士服

各地特約店に有り

川維 浜寺支部句会 (堺市)

川村好郎 報

団結もせずにはやいてばかり居り 南宗
 団結へ少うしお酒が足りません 圭本
 団結はしますが金はよう出さず 南宗
 団結がゆるぎ先代の偉さ知り 好郎
 団結をよそに社長は清交社 摩太郎
 鉢巻のまんま看護婦脈をとり 圭井堂
 団結をみだす脂粉の香が匂い 貴山
 団結がお菓子一つから崩れ 東天紅
 団結の主婦牛乳の値を抑え 雄声
 団結に弥次も半分まじつてい 狂二
 自分だけ団結しないへそまがり 凡子
 団結の名で親と子と妻もてあまし 生々庵
 ゴシップになつてしまった出来心 古方
 複雑な家庭から湧く出来心 綾女
 はつたりのメツキがはけた店じまい 裕邦
 団結の鉢巻首に風邪予防 楓

川維 弓削支部句会 (岡山県)

直原七面山遊

年とらぬ秘訣と聞いて役を受け 生薑
 食べ惜しむしてはネギにトウが立ち 只世
 やもめまた女二人に冷やかされ 賤女
 も一人の私が笑う神頼み 周甫
 幸せは富士が朝晩見えるだけ 杏朗
 何もかもチグハグになる倦怠期 三四郎
 療友と小鳥を分け合う日の別れ 芳仁
 鯉のぼり我が家に欲しい男の子 たつよ
 春雨へ一緒に濡れる人が来ず 知恵美
 インクビニをカメラの渦の中で受け 遠山
 祖父の血を引いたか孫の筆上手 天仁坊
 山盛りにして質よりも量で売り しおり
 山の事故子を持つ親をハッとし こんた

ハッとする美女にも逢わず山の道 美沙
 勝手口から悪友に呼び出され 七面山

川維 米子支部句会 (米子市)

小西雄々 報

白バイに追われるスリを来しがり 蛙眠子
 値切つて値切つて買ったのに忘れ 無閑
 忘れ物またかと駅員無表情 幸子
 春や春動物園に兎を忘れ 翠月
 団体に土産を贈る議員章 一机
 団体は疲れ観光バス走り 雄々
 わがままを記びて酒席の座を外し 君枝
 わがままに困りましたと未亡人 まさよ
 幸せはわがまま言える母があり ユリ子
 わがままと気兼ね一家の平和なり 芋人
 ワンマンがいて経営がうまくいき 三舟
 一杯のわがまま妻も悲鳴あげ 忠之
 金庫の鍵金庫の中に忘れて来 鶴丸
 ミステイクとられたと言ふ服の衣魚 青香
 いい船で死ねばお通夜も笑い声 四風子

川維 岡山支部句会 (岡山市)

浜田久米雄 報

立売りに五分停車が短か過ぎ 哲郎
 立売りはもうあきらめた帽をぬき 飴ん坊
 課長の子商品券の靴をはき 半翁
 借金で背負うて女河岸を変え 若菜
 商品券に迷い現物にも迷い 秋月
 百円の商品券につられて来 一声
 立売りを呼びとめようか一人旅 陽子
 収賄になるとは商品券知らず 久米雄
 庖丁が切れて姑のお気に召し 半翁
 祝盆のビールの泡が手をつたい 一声
 地下道に入つて女強くなり 鯨虎狼
 南丁のコトリともせぬ妻の留守 三平

不良児へ地下道までさう冷えて来る 飴ん坊
 地下道でもまれ電車でまたもまれ 哲郎
 庖丁の研ぎで板場の値がきまり 仁斉
 庖丁を食べべに通をふり回し 香林
 地下道で天道様も見ず儲け 東岸
 殺す気はなかったと庖丁ぶらさて 秋月
 にぎやかな葬式庖丁足らぬなり 若菜
 おしほりの汚れを恐れ入つて出し 久米雄

川維 京都支部句会 (京都市)

田中鳥雀 報

小さい恋即席しるこさめたまま 喜仙
 サンブルへ乗気巻尺出してくる 紫蘭
 乗るまいとしてせられた日の空虚 絵丘
 鉄の扉は冷たく黙否権 祺一
 まず鉄とかすツボをこしらえて戦争 ゆきら
 人間の意志に反抗みせて鉄 尚平
 グループが走つて笑つてる大人険しい目 鳥雀
 泡グループのはかなさを消え 司郎
 グループから裏切者の出る婚姻 生薑
 越え難き壁ありえびの静止する 真砂
 えび蟹へ靴を濡らしたランドセル 和三郎
 お好みのでえびをさがしている昼寝 よしろ

川維 高知支部句会 (高知市)

大西迷窓 選

人前は善人らしくしても見せ 満潮
 善人の子故に強い父となり 美知
 善人の裏にもあった使い込み 蟬蛇
 お人好し並んだ列の尻につき 句念坊
 善人の話でうるまの子の画本 佐千子
 磯遊び素足へ水は春を告げ 澄子
 泥んこの素足の坊や横に抱き 柏子
 妻よりも白き素足で退院す 波浪
 春の風白い素足をのぞかせる さゆ子

・暑 中 御 伺・

林 野 魁 光 呉市吉浦中町一丁目	中 村 九 呂 平 一杯水川柳会 下関市上新地町	川 維 豊 中 支 部	戸 田 古 方 黒 川 紫 香 村 上 ゆ ず る 竹 内 圭 三 小 池 し げ を 永 藤 弥 平 菊 田 い さ む	南 海 電 気 鉄 道 株 式 会 社 川 柳 部 一 同	田 垣 方 大 倉敷市水島寿町 三丁目三十一番地
----------------------	--------------------------------	-------------	---	--------------------------------------	--------------------------------

俄か雨素足になった魚売り 凡
診察を待つ身素足に知る寒さ 巖
黒ぬりの下駄に素足の似合う人 久
雪の朝素足の女さきいすぎ 吞
農繁期牛も家族も皆素足 雪枝
素足美を勝手に評価遊び 正光
機械化へ素足の土も減ってゆき 政
砂浜に素足行きかう豊漁の日 夢
花の下踊る素足の裾さばき 和香
暖かい聞いて素足のあわてよう 松
その気品素足の先にも満ちあふれ 景
新妻となった素足を見てあきず 寛
地下足袋を脱げば生活の香い 俊
供米へ新妻素足で押してくれ 緑
愛人の素足美しいなと思ひ 迷
窓

川維 奈良支部句会 (奈良市)

内海敬太郎

スト終り家族そろった夜の膳 敬
ストライキ家族を狩り出させ 平
ストライキ金と力のあるかぎり 建
遅刻してゆったり登校大学生 博
遅刻する子に新任の真面目すぎ 敬
初犯ではない刺青のど根性 春
年毎に給料の上がるストライキ 清
ストライキ踏切番の高イビキ 一
会社側またストかと不干渉 敬
教科書と共に通学トラの巻 敬
遅刻して桜井線と言いのがれ 壮
遅刻して彼女に弱いなさげなき 三
ストライキ朝の新聞にぎやかく 福
いらぬ時出て来る物が根性なり 天
根性の悪さは女の方にされ 笛
生

川維 土佐支部句会 (高知県)

川竹松風報

焼けたよりましと泥棒あきらめる 勝
泥棒へもう手遅れの犬を飼ひ 古
泥棒の度胸ついでに飯を食ひ 青
コン泥の身元洗えば子沢山 嵐
宴会はまだ素人で二日酔 康
宴会に遅れ上座に近い席 平
燭元へ来た花嫁が叱られる 耕
三次会だんだん家が遠くなり 生
立話長くて犬もすわりかえ 未
ニコソンの欠伸も長い春の雨 益
飲む時の尻の長さを毒づかれ 正
先輩に恋のせりふも教えられ 祐
もてなしの酒先輩も酔うてくれ 一
ガールフレンドは私が払います 喜
ガールフレンド送る月夜のシルエツト 柳
土曜日曜とガールフレンドが変り 松
クラブ活動ガールフレンドと呼ぶ 喬
雨の日の詩集にも飽き孤独感 翠
寝そべって借金断る策をねり 三
待望の庭もろろびりつけて建ち 利
銀行の管理で会社立て直り 狂
銀行がしきぎを呉れた預金高 声
銀行が隣へ出来ただけの縁 喜
怒

大阪通信病院川柳会

橋本幸男報

手練手管もさすが年増に堂に入り 没
本場の事言うて年増ににらまれる 食
家計簿を値上げブームがかきまわし 見
右へならえと妻揚げまで値上げ 史
その内に毒を秘めるかケシの花 葉
毒吐いてから人生感が変り 風
中毒の事にも衛生講座ふれ 仙
酒だけが錆びた歯車休ませず 洞
草 雄
右 論

歯車のようにガツチリストもなし けい女
歯車の欠けた顔してためて居る よしを
人力の歯車を振り幕となり ハナ子
値上げみな池田首相のせいとされ 宏
(池田首相渡米)
歯車の油をさしに渡米する 史
葉

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻圭水報

株持つそのストライキ気にかかり 宏
株ブーム銀行しきりに水をさし 子
みなづき

大坂形水

同御中
大坂市東区糸屋町一ノ二

株式にしても赤字はまだつづき 圭
値上りの夢は大きい五百株 水
我れも亦世に遅れじと株を買う 雄
株ブーム幼な馴染ものし上り 文
株買うて夕刊楽しいものにする 句
未亡人端株の処置を頼みに来 念
貴山
路郎

杏林川柳会 (大阪市)

落ちぶれへ差出人のない為替 太
投げテープやるせなき胸慰める 希
岡惚れをたしなめられて芸妓すね 珊
手を取って起して呉れる勝力士 枝
オス一声十代の友情にじみ出る 郎
友情の深き遺族へまでつづき 阿
名も言わす「オ」で通じる電話口 茶
一 哲
仲 野
迷
路
小
石
一
伸

コクヨ川柳会 (大阪市)

愛に生き愛に死のうとうぬはれて ぼ
はたる

富柳会句会 (富田林市)

阿部柳太郎

歌う娘より親が必死の力みよう 静
気の毒で顔ををむけて聞く小唄 林
五木唄父がうたえねばねぶか 庵
思案するように見えかけ値を値切り 吉
女房も子供ももうたう花の下 太
義足抱いて思ひ軍歌と生きたる 柳
ドーナツのように靴下ぬぎする 紅
無理算段惚れた男は弱いもの 月
無理をして天引貯金に支えられ 八
信心のお百度を踏む娘の素足 郎
汐干狩素足素足が浜に咲き 正
顔自信ないが素足にある自信 博
フアンションシロ素足のマニキュア 美
関取の素足魅力と言う女 代
塗下駄の素足が似合うゆかた 尚
御近所も素足余震がまだ続き 史
ひろむ

酌よし 千日前大劇裏
TEL 〇二七〇
味よし プレノ橋近地下
TEL 〇一四七

大萬

梅里の店
★大万川柳(第百二十六回)を募る
兼題「素人」路郎先生選
締切・八月十五日 五句以内
発表・八月廿日 (店内掲示)
投句先 阿倍野区松崎町三ノ二
大万川柳会宛



柳 樽 室

路 郎 生

★いくら暑くても原稿紙が飛ぶので扇風機は禁物という編集局。ルームクーラーとまでは手がとどかぬので流汗リンリのありさまだ。

★七月十日は私の誕生日なので恒例の川柳まつりが不朽洞会員の手で十六日に賑やかに開催された。

★元氣モリモリの私は七月一日から五日間の旅に出た。松山・道後・砥部の五日間をゆつくりと私らしい生き方をしてみようと思っ

たが、矢張り忙しき五日間だった。私と多忙は宿命的だとも言えよう。愛媛県には十一市あるの

にまだ何回か足を運ばなければならぬ。その時にはゆつくりと川柳人にも会いたいと思っている。

★今度は松山市では山本耕一路、沖原光雄の両氏、市外では河本南

牛史氏の訪問をうけ、今治市の長野文庫氏、越智一水氏、今治市外

の渡辺曉童氏等が、わざわざ遠方から訪ねて来られ久闊を慰したに過ぎなかったが、旅はいいものだ

とつくづく思った。仙波杏子女史は当分、砥部にとどまり、存分に郷里の空気を吸われている。

★中島生々庵氏、河村瑞川氏の欧州の旅、牟田一哲氏夫妻の米欧の旅も詩囊を膨らませてつつがなく帰日された。

★私と同じ七月十日が誕生日の加茂正一氏（早稲田大学教授）は誕生日を記念して連作歌集「そのかみ抄」を刊行された。何かを遺すために、お互いに長生きしたいものだ。

★大阪市民文化祭の川柳大会も、本年で十三回になり十月十五日（日）に行われることとなった。

そして本年からは短歌、川柳、俳句とも主催が大阪市、大阪市教育局、委員会、関西短詩文学連盟に統一された。それぞれ斯界のために有意義の会合を持ちたいものである。

★旅行から帰って、三嶋美笑君が亡くなったことを知った。多くの柳人と共に快癒祈願をしたことも空に帰した。

★画家の山口草平氏も八十才で亡くなられた。斯う次ぎ次ぎと亡くなられると近火の感深しである。

★寄稿家諸氏、愛読者諸氏のご健勝を願うことまこと切なるものがある。

・ペンの散歩・

▼七月の大阪の夏まつりは愛染まつりから始まって、三十一日の住吉大社南祭でフィナーレを告げるまで、大小八十七社のまつりが商都の夏をいろどるのである。その

中で文化大阪の一大行事としてわが川柳川柳まつりはこととして第八回目を迎え、路郎先生の七十三回目の誕生日を祝う、門下一同のよろこびも大きく、会場に笑顔がいっぱいだった。

▼お年より五つは若く見えるという先生のこのころではあるが、生きた川柳史としてまだまだお仕事を山積しているのだからとご自愛

川 柳 雑 誌 社

麻生路郎
麻生霞乃
中島生々庵
編集局

北川春菜
戸田古方
清水白柳
丸尾潮花
真鍋一瓢
水谷竹莊
不二田一三夫
後藤梅志
橋高薫風子
句会部

黒川紫香
菊田いさむ
総務部

八木摩太郎
林 宏子

暑中御見舞い申し上げます

ねがわねばならない。正確な大阪川柳史といったものも後世に必要

ではないだろうか。

▼後記を書ききょう、二日間で三時間より睡眠をとっていなかつた。両先生からムチャをしたらいカンとお叱かりをうけたが、一日も早く本をお届けするためには、編集局は毎月こんなことを繰り返かえしているのである。愉快指数の楽し。た汗ま。（二三夫）

八月句会・川柳支部

☆淀川句会・6日（日）一時、題、旅・再会・同伴、会場岡山日赤支部。☆明和研究句会・13日（日）一時、題、骨・世相・太陽、所、阪神鳴尾駅東南二百米鳴尾公民館、☆玉造句会・10日（木）七時、題、水遊び・模型・冷汗、所、市電玉造南百米大阪信用金庫、☆阿倍野句会・20日（日）六時半、題、やり直し・トリオ・すし・和、所、松崎町三ノ一〇割烹大万。☆京都句会・16日（水）夕、題、困地・九・麩、所、四条繩手仲源寺。☆になり句会・27日（日）六時、題、視野・文なし・遮断機・所、玉出新町通一ノ一後藤梅志居。☆南海電鉄句会・17日（木）六時三〇分、題、地下鉄・目的・ちくはく、所、難波高架下親和クラブ。☆宇部句会・6日（日）一時三〇分、題、散財・カタログ・判定・濁る、所、宇部市東区恩田長沢市住、津秋六花居。☆奈良句会・6日（日）十時、題、電報・真面目・吟行雑詠・所、西の京駅集合。



働く人の保健剤

8種の必須アミノ酸・9種のミネラル・12種のビタミン
これら29種の栄養を合理的に配合した新しい栄養剤です
だるい・疲れる・元気がない・こんな方にとにかくお試し下さい

強力 **モリアミンM** EM

エムエム印



森下製薬株式会社
大阪・道修町
電話・二二八四

昭和36年度 大阪市民文化祭

第13回 川柳大会

日時 昭和36年10月15日(日)……詳細は次号で

大阪市民文化祭
大阪市教育委員会
関西短詩文学連盟
毎日新聞社

頭を使う人の

胃の薬

プロバンM錠

10T・30T・100T

★健保適用

神経を鎮めて原因から治す

胃酸過多から消化性潰瘍にいたるまで多くの胃腸病は、精神的な負担や連続した大きな根本原因をなしていることが認められています。

プロバンM錠は胃腸病の原因、とくにその根本的な原因を、新しい治療・予防剤で、各成分の総合効果で迅速・的確にあらわれ、しかも持続的です。また副作用が少なく、いつでも服用出来ます。

新発売



あなたの句帖が出来ました

★路郎好みたけに、すばらしく歌が
さいています。句会でお使いにな
る、抜けた句の整理にお使いにな
れば、何冊かでも、あなたの句集の礎
稿が出来ます。ク柳友の贈答に、
句会の賞品にも最適です。是非二利
用下さい。

一冊五十四・五十六・五十八・六十冊五

川柳雑誌社

電話 大阪 〇六〇八一
郵 郵便 〇七五〇五

食品と科学

食品と原資材・機械・包装の総合誌

8月号発売中

150円 千18円

特集

イノシン酸の現状と将来
新しく許可になった食品添加物
味増製造の問題点

講座

食品工場の衛生 ③
界面活性剤の利用 ⑩海外ニュース 特許ニュース
意匠ニュース 商標ニュース

展望台 主食・罐詰・菓子・飲料・添加物

食品と科学社

大阪 6702番

printed in Japan

川柳雑誌社

電話 大阪 〇六〇八一
郵便 〇七五〇五

川柳雑誌社

第三十六号
定価 九〇円
(送料六円)昭和三十六年八月一日発行
昭和三十六年七月廿五日印刷

編集 斎生 幸二 郎

投稿規定

▼▼▼▼
投稿は各稿必ず別紙に認め、生所氏
名推挙を明記する事。
「近作柳稿」は一般作家の雑吟を募
る。「課題吟」は誰しも投稿が出来る。
「川柳塔」の投稿は不朽詞会員に限
る。

毎号募集

近作柳稿 (毎月一回二日発行)
川柳塔 (毎月一回二日発行)
章 (評論・研究・感想其他)
文 (毎月一回二日発行)

家青やせ (毎月一回二日発行)

留守 (毎月一回二日発行)

課題吟募集

大西八歩

中島小石

友淵山

高橋操

清水白柳

木松東岸

九島操

八月十五日発行

蓬萊

福助靴下



あなたの個性を生かす

福助足袋株式會社
福助商事株式會社



涼しさ たのしさ 乗せて



近鉄特急
全列車 冷房

座席指定特急券 いずれも片道料金・こども半額

大 阪一名古 聖	250円	ほかに 運賃	450円
大 阪一名治山田	200円	" 運賃	340円
名古屋一名治山田	200円	" 運賃	260円

● 5日前から特急始発駅と停車駅 ● 14日前から近畿日本ツーリストと日本交通公社全国営業所

近畿日本鉄道

大阪一名古屋 ノンストップ 2時間27分

全列車 轉機駅に停車

△は名古屋・大塚連絡伊勢急ぎ特急 この特急は①寺田山田野島
瀬バスターミナルで夏島急ぎ特急バスに接続 ②途中 国府 八木
吉川 松阪 伊勢市と津 四日市 桑名に停車 ○は名古屋・伊勢間

大塚上本町発	7.00	8.00	▽ 8.10	9.00
▽ 9.10 11.00	▽ 12.10	13.00	▽ 14.10	15.00
▽ 16.10 17.00	18.00	▽ 19.10	20.00	—
近鉄名古屋発	7.25	▽ 7.35	8.25	9.25
▽ 9.35 11.25	▽ 12.35	13.25	▽ 14.35	15.25
▽ 16.35 17.25	▽ 17.35	18.25	20.00	○21.00

